

東京大学本郷キャンパスの形成と変容に関する研究

岸田省吾



東京大学本郷キャンパスの形成と変容に関する研究

岸田 省吾

1章 背景と目的、対象、方法	1
1-1 背景と目的	1
1-2 対象	3
1-3 方法	4
1-4 論の構成	15
2章 大学の空間類型	17
2-1 クワドラングル	18
2-2 宮殿形式	20
2-3 キャンパス	25
3章 本郷キャンパスの形成過程	27
3-1 資料	28
3-2 東京大学の組織編成、大学の理念における変化ならびに関連年表	31
3-3 形成過程の記述の手順	36
3-4 本郷キャンパスの形成における五つの時期	37
3-5 草創期；明治10年の東京大学開設から明治27年頃まで	38
3-6 明治期；明治28年頃から大正12年まで	42
3-7 内田期；大正12年から昭和30年代まで	44
3-8 内田期以降；高度成長期；昭和30年代から昭和50年代まで	47
4章 本郷キャンパスの分析	48
4-1 分析対象の三つの時期	49
4-2 分析・草創期の変容（M10-M27）	50
4-3 分析・明治期の変容（M28-T12）	61
4-4 分析・内田期の変容（T12-S30年代）	75
4-5 全期間のまとめ	89
5章 対照例の分析	96
5-1 分析対象とした時期における大学の変容	97
5-2 ベルリン大学	102
5-3 ボローニャ大学	106
5-4 ケンブリッジ大学ーダウニング地区	110
5-5 バリ大学ーラ・ソルボンヌ	113
5-6 ローマ大学	117

5-7	テキサス大学オースチン校	120
5-8	ハーバード大学—ノースヤード・ホルムズ地区	125
5-9	対照例の分析のまとめ	129
6章	東京大学本郷キャンパスの特徴	135
6-1	東大本郷キャンパスと対照例における適用形態の比較	136
6-2	宮殿形式と近代大学	142
参考文献等		145
謝辞		150
注		151
資料図版		156
東京大学	TK1-150	
ベルリン大学	BR1-6	
ボローニャ大学	BL1-6	
ベルリン工科大学	BT1-5	
ストラスブール大学	ST1-3	
ケンブリッジ大学	CM1-5	
パリ大学	SR1-6	
ローマ大学	RM1-4	
マドリッド大学	MD1-2	
テキサス大学	TX1-13	
ハーバード大学	HV1-7	

## 1章 背景と目的、対象、方法

### 1-1 背景と目的

大学は、長い期間にわたり持続してきた社会制度であり、その発展の過程を通し、固有の空間を形作ってきた。専用の建物を持たず固定された形がなかった原初の大学から、都市的なスケールにまで拡大した現代のキャンパスに至るまで、大学の空間は、多様な力が作用しつづ絶えず変化し、変容を遂げ、その過程で特徴ある空間のあり方を示してきた。従って大学の空間に固有性があるとしたら、その形成と変容の過程の中で繰り返されるものとして現れるであろう。これを空間を編成するという能動的な視点から言うなら、その変容の過程を規定し、空間の編成を決定する動的な性格を持つ大学固有の特徴と言える。

現在の多くの大学は大規模かつ複雑な組織体であり、その空間も変化が激しく一体感に乏しい場合が少なくない。空間を動的な特徴を通し理解することは、安定しているながら同時に変化も許容する持続的な大学空間の形成のために必要となる。

本論の目的は、大学空間の動的な特徴に関する研究の一環として、変化において把握された大学の空間編成における固有性を理解することである。具体的には、東京大学のメインキャンパスである本郷キャンパスを取り上げ、その空間的な骨格の実際の形成過程を分析し、それらを規定してきた動的な特徴を明らかにしようとするものである。このキャンパスは震災のため、欧米の諸大学と比較するならば根本的な変化を短時日の内に行い得た特異な例である。動的な特徴を捉えるには格好の対象と言える。

また、東大において分析対象とした変容の期間は、欧米においてもいわゆる近代大学の形成と変容が進み、大学の空間が大きく変貌した時期に概ね一致する。そこで欧米における代表的な大学を取り上げ、対照例として本郷キャンパスと合わせ分析する。限られた範囲ではあるが、当時形成期にあった近代大学の空間の一般的な特徴を理解し、それらとの比較を通し東大の特異性、固有性を把握する。

以下、本論の目的をまとめる。

1) 東京大学本郷キャンパスの形成過程は、大学空間の展開の歴史に見られる一定の空間編成の形式—宮殿形式によって規定されてきたことを明らかにする。

2) 上記の分析の前提として、分析対象とする期間について、空間の編成形式の形成と変化に直接関わる事実関係を明らかにする。

3) 本郷キャンパスの形成とほぼ同時期、同内容の欧米の大学の空間において、本郷キャンパスに見たのと同様な編成形式が多様な展開を規定していたことを明らかにする。

4) 上記3)の事例の分析結果と比較し、本郷キャンパスの形成と変容に見られる固有性を明らかにする。

5) 近代大学特有の空間形成を規定するものとして、宮殿形式の意味を明らかにする。

## 1-2 対象

分析の主対象として、東京大学の本郷キャンパスを取り上げる。ほかに対照例として欧米の主要な七つの大学を取り上げる。東大の本郷キャンパスを取り上げるのは、上で述べたことの他に、大学の近代化に伴う空間的な変容を通し生じた多くの問題を、単に西欧の大学特有の問題としてだけでなく、この期の大学に共通する問題として見るためである。それは西欧世界の外の文化圏にあって、近代大学として空間を整備し今日に至る最古の例の一つである。

対照例とした欧米の主要な大学についても、上述したように、この期の近代大学の空間的な変容に見られる共通性を明らかにするためであり、またそれとの比較を通し、東大本郷キャンパスの固有性を明らかにすることができる。

分析の対象とした期間は、本郷キャンパスについては、大学が本郷の地に移転し、最初の建物を建設し始めた草創期から昭和30年代までの変容を考察する。その期間に本郷キャンパスの空間的な骨格が形成された。対照例については、原則として本郷キャンパスについて考察の対象とした変容とほぼ同時期の類似した施設内容が展開する特定地区を選び、その変容を分析する。分析は原則として大学施設のうち専ら教育・研究機能が展開する区域を対象とする。病院地区や寄宿舎、寮、教師館などの居住機能が展開する地区は含まない。

### 1-3 方法

#### 1-3-1 大学空間の主要な特徴

大学の空間には二つの主要な特徴が見られる。

第一に、大学の空間は、その変容を通して初めて固有の特徴を理解できるものである。大学の空間はその目的や制度の変化に適応し、絶えざる変容を遂げつつ持続してきた。たとえ長期計画などが立てられたとしても、その通り実施されるとは限らない。19世紀までの大学にはキャンパスプランニングという計画概念自体存在しなかった。長期にわたる大学の展開の過程では、空間を規定する力もさまざまに揺れ動き、多くの視点から判断が行われる。たとえある時点で予想が立てられたとしても、実際の変化はそれを越えてゆくことは少なくない。大学の空間に固有の特徴があるとすれば、それはさまざまに揺れ動きながら進む実際の変容の中で、持続し、反復されるものとして現れてくるものである。

こうした大学空間固有の特徴を理解するには、実際の変容を分析し、そこから抽象しなければならない。その空間を規定する固有性は、ある特定の時点での空間編成を分析するだけでは十分ではなく、一連の変化を通し繰り返し現れる特徴と、一時的な現象とを区別し初めて把握できる。

第二に、大学の空間は、個々の部屋や建築あるいは特定用途の空間より、部屋と部屋、建築と建築など、特定用途の空間の間に形成されるオープンスペースに固有の特徴が現れるものである。

個々の空間はいかに多様であっても大学独自の空間とは言えない。大学はどのように複雑化し、大規模になろうと、本来、成員の共同性に基づく組織であり続けてきた。共同性を支える活動、あるいはその具体的な現れは、大学の成員同士のコミュニケーションである。<sup>1</sup> 大学の空間を構成するさまざまな場において、そうしたコミュニケーションを担う場としては、研究室など個別の空間が集合し形成する公共的な空間を第一に挙げられる。

公共空間はサービス用途に特化した場も含む。ここで言うコミュニケーションは本来機能的には特化していない場に生起するものであった。従って公共空間と言うより、オープンスペースと言う方が適切である。オープンスペースは本来空の、空いた、占められていないと言う意味である<sup>2</sup>。それは外部空間が典型であるように、個々の研究教育施設を関係付け、大学全体を統合

する基礎となる。逆に大学全体としてコミュニケーションを求める力は第一にオープンスペースに反映し、また大学の空間的な特徴はそれに集約されると言える。実際、多くの優れた大学空間に見ることができるものは、ここで言うオープンスペースが作り上げる豊かな環境である。

大学におけるコミュニケーションには外部世界との関係も含まれる。オープンスペースの中でも屋外のオープンスペースは、大学の建物の相互関係に加え、大学と外部世界との関係を直接規定する。大学空間の固有性を明らかにするには、建築群が敷地など、それを構成する諸要素すべてとともに形作る狭義のオープンスペースの特徴も明らかにしなければならない<sup>3</sup>。

また、オープンスペースはその本来の意味からも、施設の展開の余地として機能する。それが存在すること自体が大学の活動にとって不可欠の余裕を与える。大学の活動における一面での自由度を担保する事は、長期にわたるコミュニケーションの可能性を広げ、オープンスペース全体として大学空間の特徴を支える。

#### 1-3-2 分析の対象としてのオープンスペースと分析の手順

前項で見た大学空間の基本的な特徴を踏まえ、本論の分析は、外部空間としてのオープンスペースに注目し、その編成の形態が一定の期間の間に遂げる変化の過程を対象とする。分析は以下のような手順で行う。

##### 1 分析の対象としてのオープンスペース

ここで言うオープンスペースとは、大学の構内において、建物の外部に存在し、主に人間が使用し、知覚し得る範囲の空間。ポーチ、コロネードなど半外部空間も、そうした一義的な外部空間に密接に関係しているので、オープンスペースとみなす。基本的に建物、地形、植栽などによってその特徴は規定される。

相当部分が建物によって占められている区域であっても、その建蔽部分も含め、同一の特性のオープンスペースのまとまりとみなすことが自然であるような区域が存在する。例えば多数の特殊機能の付属屋が建て込んだ区域は、一括して裏的なオープンスペースと言え。また東屋が置かれた庭園も東屋の建蔽部分も含め全体として庭園、ないしは庭園的オープンスペースと言え。

オープンスペースは、本来、空の、開いた、占められていない空間と言う意味が基本である。これを特定の目的的な空間に対立するものとして捉えるなら、建築内部であっても共用の空間はオープンスペースに近いし、逆に建築の外部であっても、たとえば運動施設や駐車場など機能的に特化した区域はオープンスペースとは言えない。本論ではこうした機能的な区別によらない両者とも含むより緩やかな定義で使うことにするが、分析は先にも述べたように、原則として外部空間としてのオープンスペースを対象とする。内部空間のオープンスペースは外部のそれを規定する場合など、必要に応じて見ることになる。

## 2 オープンスペースの空間形態と特性および空間の編成形式

オープンスペースは、単に建物、敷地などの諸要素によって幾何学的にその境界を限られた三次元的な空間形態のまとまりからだけで成り立つのではなく、オープンスペースの境界を定め、境界を形成している物のあり方を通して現れる「特性」を備えている<sup>4</sup>。オープンスペースの境界を決定している面の形態や物質的なテクスチャー、あるいはその区域の使われ方、保全維持の状態など多くの要因によって規定される総合的な空間の性格である。たとえば都市的、田園的、裏的、表的などと形容される、その場の性格である。

特性を規定する要素を主だったものだけでも列挙してみるなら、その区域の植栽の様態、そこへの、あるいはそこを通るアクセスの性格と形態、そこに展開する、あるいはそこに接する建物などの形態や機能、配置の密度や建物の相互関係、自然地形や造成された地形など、数限りなくある。また、結果として形成される特性自体も千差万別である。

本論では集合的な形態として現れるオープンスペースの編成の分析をするものである。編成形式は、大学のオープンスペースの基本的なまとまりを決め、それら相互の、あるいは外部環境との関係を規定する形式のことである。編成形式はオープンスペースの圍繞の様態、開放の程度と形態、他のオープンスペースとの関係など、形態的な特質の他に、オープンスペースの特性を選択し、規定する。たとえば都市に連続する主玄関の開く表の正面であるか、グリーンで満たされた庭園的オープンスペースであるか、単に未利用なまま捨てられた空地なのかといったそのオープンスペースの特性までも含め、配置を決め、一定の関係にもたらず形式のことである。本論でオープンスペースを分析するということは、こうしたオープンスペースの形態と

特性を編成する形式を分析することである。

しかし先に述べたように特性は無数にある。実際の分析に当たっては、本論で問題とする編成形式を判断する上で必要な範囲の特性に絞って論じることになる。

具体的には表(的)、都市的、田園的、裏(的)、庭園的、空地的などの特性である。さらにこれらに広場、前庭、街路、街区などオープンスペースの基本単位や編成領域など、特性と形態の両方の特徴を合わせ定義される諸要素を加え、本章次節以降で定義しておく。

## 3 オープンスペースを規定する主要な諸要素

オープンスペースの空間形態と特性はさまざまな諸要素に規定されているが、内部空間や物体の形態と比較すると分節が不明確である。必ずしも部屋名称で呼べるような明確な分節単位があるわけでもなく、ことに変化の過程では過渡的形態がしばしば見られるので、オープンスペースの形態と特性を読みとるには、それを規定する主要な諸要素にまんべんなく着目する必要がある。

たとえば深い木立が続く構内に一群の建築群が一つのオープンスペースを囲んで配置されているとき、その囲まれたオープンスペースの中にも深い木立の植栽が施されていれば、オープンスペースのまとまりとしては大きな構内全体という一つのまとまりと見るか、建物に囲まれた広場的なオープンスペースとその外側のオープンスペースからなる全体と見るか、あるいはその両者であると見るか判断は分かれる。その場合、建築群の配置形式や広場的オープンスペースのスケール、個々の建築の相互関係やスタイルの異同、植栽や外構、アクセスパターンなど総合的に見なければその構成は確定できない。

オープンスペースの空間形態と特性とは、それを規定する基本的な諸特徴が相互の対立関係を通し形成するオープンスペースのまとまりとその関係の総体と言える。スケールの大小、全体の構成、分節関係におけるレベルの上下を問わず、こうしたオープンスペースの形態的まとまりを規定するのは、建物、外構、オープンスペースそのものなどの形態的特徴がなす関係の束である。

以下、オープンスペースの形態と特性を規定するそうした諸要素の主だったものを列挙する。これらは分析の前提であり、具体的な分析に先だち確認す

る。

- 1 全体配置の形式（建築や建築群の配置形式）
- 2 周辺環境と地形（周囲の都市的、建築的、自然的環境-地形、植生-など周辺環境との関係から規定されるオープンスペースのまとまりを見る）
- 3 建物のスタイル（スタイル-古典系対ゴシック系、それらの改良的なものなど）
- 4 建築型（建築の基本的な空間編成の形式。主に平面形式であり、中庭型、一文字型、コの字型などがみられる。また、内部サーキュレーション部分（玄関、廊下、階段など）は、それに接するオープンスペースの特性を規定する。オープンスペースの特性を判断する上で必要に応じ検討する）
- 5 道路と植栽（舗装や植栽のパターン、植樹などランドカバーなど）
- 6 アクセスパターン（敷地外からのアクセス位置、形態。敷地内の動線の位置、形状-幅、舗装の様態、線形。建物内外の境界部分における動線の様態）
- 7 建物の機能（本館的機能か付属的な機能-特殊、限定された用途-、共用、サービス機能を区別する）

#### 4 オープンスペースの基本的な単位と編成領域、およびその階層構成からなるオープンスペースの形態 図1-1

本論では大学空間のオープンスペースの形態と特性を編成する形式を分析する。オープンスペースの編成はオープンスペースの基本的な分節単位を抜き出すことから始まる。オープンスペースの基本的な分節単位は、実際の空間の目視あるいはそれに代わる写真、図面等の視覚的資料、前項で挙げた諸特徴などを総合し理解されるものである。こうしたオープンスペースの分節単位の包括的な名称として、それを領域と呼ぶことにする。領域は、一定の空間編成や共通する特性、同型の建築型の反復やテクスチャーの連続などが見られ、境界をもち、中心性や軸性といった明確な形態的特徴を備えた一体的なまとまりをなすオープンスペースの区域を指す<sup>5</sup>。本研究が論じようとしているオープンスペースの編成形式も、複数の領域を関係付け、まとまりを与える形式を言う。

それは建物で囲まれた広場や街路、街区のように境界が明示されることも、建物正面の前庭や小規模な付属屋が密集する裏的な領域のように、単に境界は暗示されるだけのこともある。領域は建物を含まない狭い意味でのオープンスペースも、オープンスペースの他に建蔽部分も含んだ広い意味でのオープンスペースを意味する。

明確な形態的特性を持つ広場や街路、建物の密集した裏の領域などは、より大きな、より境界の曖昧な領域の「地」の上に形成される「図」である。こうした単純で堅固なまとまり-単純な形態的特徴と単一な特性-を示す領域は、オープンスペースの最も基本的な分節単位であり、これをオープンスペースの基本単位あるいは単にオープンスペースと呼ぶ。

この基本単位は、多くの場合、より小さな分節単位に分けられるが、対象の全体のあり方に応じ規定されるものでもあり、一概にそのスケールや形式を決めることはできない。また、構内全域に「地」として連続的に広がるオープンスペースも、単一の特性で一貫しているならば、一つの基本単位とみなせる。

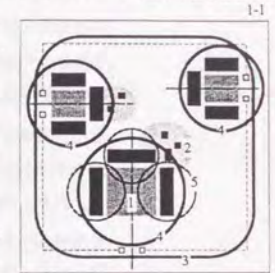
複数（一つ）のオープンスペースの基本単位が関係づけられ、全体として一体的なまとまりをなすものを編成された領域あるいは単に編成領域という。編成領域はオープンスペースの基本単位を複合し、統合し形成されたまとまりであり、後に明らかにするように本論の主題である宮殿形式も、二つの相異なる特性のオープンスペースの基本単位を統合し、一体的な編成領域を作る編成形式である。

建物に囲まれた中庭は一つのオープンスペースの基本単位をなすが、一方建物周辺のオープンスペースも含めた領域全体が形成する区域は、ここで言う編成領域の一つである。また、オープンスペースの基本単位も、先に挙げた一貫した特性の「地」として広がるオープンスペースも、共に編成領域の特殊な形態と考えられる。

#### ーオープンスペースの編成領域がつくる階層構成

大学の空間にあっては、構内全体のスケールから建物近傍の小規模なものまで、相互に統合と分節の関係にあるさまざまなスケールの編成領域が見られる。あるレベルの編成領域はより上位の領域に統合され、またより下位の領域に分割されるというように、すべての編成領域は階層的な関係を上下のレベルの編成領域と結びながら、構内の全域を形成する。

オープンスペースの基本単位と編成領域



- 1 オープンスペースの基本単位（表のオープンスペース）
- 2 オープンスペースの基本単位（裏のオープンスペース）
- 3 全体レベルの編成領域
- 4 中間レベルの編成領域
- 5 要素レベルの編成領域



これは広大な敷地を有することの多い大学の空間の現実の認識にも近い。大学の空間は全体を一挙に把握できない場合が多く、部分から構内全体に至るまでスケールに応じたレベル毎に基本的な分節の単位を把握し、その上で全体の理解が組み上げられてゆく。

ただ、実際にそうしたスケールに応じた階層を詳細に分離し分析しても意味が少ないことから、本論においては、最大三つのレベルで分析することにする。おおよそ建築単体のスケールで見られるオープンスペースの編成を要素レベル、いくつかの建築群が集積し形成されるオープンスペースの編成を中間レベル、構内全体のスケールで形成されるオープンスペースの編成を全体レベルとする。

先に見たように、こうした各レベルの諸領域同士は、要素レベルの編成領域がオープンスペースの基本単位を編成し、中間レベルの編成領域が要素レベルの編成領域を編成、全体レベルの編成領域が中間レベルの領域を編成するというように、相互に統合され分節される関係にある。分析される直接の対象であるオープンスペースの編成形式とは、こうした階層的関係にあるオープンスペースの基本単位ないし編成領域を関係づける形式の総体のことである。<sup>6</sup>

##### 5 主要な特性と基本的単位の定義

宮殿形式の判断に必要な特性とオープンスペースの基本単位などについてあらかじめ定義しておく。基本は表・都市的なオープンスペースと裏・庭園的、空地的なオープンスペースの判断である。オープンスペースの特性に関する項目としては、

表(的)、裏(的)、都市的、庭園的、空地的などがあり、さらにこれらに特性と形態を合わせ判断する前庭、広場、街路、街区などのオープンスペースの基本単位を定義する。

一表・裏は対となる。表は街路など建物の外からの寄りつきのある主入り口のついた面の特性を言う。街路や門に面し、構外の都市空間に連続することが多い。裏は狭い意味では、母屋があって初めて意味をなすような付属的な施設を必要に応じ自由に展開する一体の区域のこと。都合に応じ配置や建築形態、外構などにおいて相互関係の薄い形態の出現を見やすい。機能的にも特殊性が増すと言える。広い意味では表的な特性以外の特性全般を言う。

従って、空地的なオープンスペースや庭園的—その多くが表・都市側の反対側に置かれる—なオープンスペースなどが含まれる。

一都市的とは基本的に都市に面し、あるいはそれに空間的に連続し、比較的密度高く配された建築群を関係付け、配置を規定するようなオープンスペースの特性を指す。何らかの形で建物に囲まれ、あるいは挟まれているオープンスペースであることが多い。外部に向かいあるいは連続することから、基本的には表のオープンスペースに含まれる。

一空地的とは庭園、運動施設など積極的、目的的にしつらえられたわけではないオープンスペース。未利用地、荒地。多くは裏のオープンスペースに変化してゆくので、裏にまとめられる。

一庭園的とは空地と共に広い意味での裏の領域としてまとめられるオープンスペースの特性。庭園がもともと「囲われた場」<sup>7</sup>と言う意味であったことから、表、すなわち外部に開かれた領域とは対立する特性を備える。厳密には、使われ方、植栽やその維持の程度などによって、裏の領域あるいは空地とも区別される。裏的なオープンスペースは、第一に母屋があって初めて意味をなすような付属的な施設を必要に応じ自由に展開する区域のことである。宮殿形式にあっては庭園がそうした領域に読み変えられてゆくことが多いので、裏との厳密な区別は必要な場合にのみ行う。

一前庭は建物の正面にあるオープンスペースで、基本的にその建物正面を見たり、車寄せのためのひけをつくる。前面建物の専用の空間である。都市空間の広場とはその建物への帰属性、専用性において異なる。都市的広場でもその前面の建物へ帰属する度合いが高い場合、前庭的広場となる。こうした両義的なタイプは多く見られる。

一広場はそこへの進入に制限のない都市空間で、建物などで囲まれ、空間形態としては強い中心性を示すことが多い。特定の建物のための前庭様に整備されることもある。

一街路は広場とならび都市空間の基本的な要素である。交通の空間であり、空間形態としては軸性が強く、両側面の建物の壁面が規定する度合いが強い。これに対立するものとして園路がある。これは庭園の中に引かれる比較的幅が狭く、地形などに合わせ屈曲した形態となる。庭園の田園性を損なわないように、非舗装面と連続的にされることが多い。

一街区は街路に囲まれた一定の広がりを持つ区域を指す。四面とも街区に囲まれた場合が多い。スケールもまちまちである。

## 6 変容の時期と段階、および分析の実際

大学空間の変容過程は、いくつかの時期に分けられることがある。その場合は分析は時期毎に行い、最後に分析対象とした時期すべてを通じ、宮殿形式自体の適用形態が変化してゆく過程を明らかにする。東大の場合、三つの時期が区別される。

また、各時期の中に、さらに編成形式にとって意味ある変化が生じると思われるごとに諸段階が区分される。本郷キャンパスでは各時期とも概ね四つの段階にまとめられる。各々についてオープンスペースの形態、特性に関わりある変化をマークした配置図を作成する。

この変化の各段階についてオープンスペースの空間形態と特性の編成—以下単にオープンスペースの編成という—を見る。手順としては前項で述べたオープンスペースのまとまりを形成する諸特徴についてまとめた表を作り、その他資料と合わせオープンスペースの空間形態と特性を判断する。

こうして抜き出されたオープンスペースの基本単位、およびそれらから判断した編成領域を、空間のスケールの三つのレベル毎にまとめ、段階をおって変化を見るための変化表を作成する。

三つのレベルは本郷キャンパスの場合、塀で囲まれたいわゆる構内のスケールに対応して全体レベルのまとまりがあり、その中に展開する個々の建築のスケールにはほぼ対応するオープンスペースが要素レベル、建築が群として形成する全体と要素の中間的なスケールのオープンスペースのまとまりを中間レベルとなる。要素レベルのオープンスペースは先に完成したオープンスペースの基本単位そのものであることも複数のそれらが一つのまとまりに編成された編成領域であることもある。これをダイアグラムにすると図のようになる。図1-1

この表からオープンスペースの形態（中心、軸、建物周辺のオープンスペース、編成領域などのまとまり）と特性に関し年代毎に変化が起こった部分に着目し、分析対象の時期を通じ反復される特徴の存否を検討し、そうでないものと比較しながら、変化に共通する特徴をまとめ、一定の編成形式に整理する。これは全体の変容を規定する編成の形式でもある。以上をダイアグラムにする。

## 7 宮殿形式の基本的特徴の確認

5とは別に、本分析に先立ち概観する大学の諸例から仮説的に抽出した空間

編成の形式—本論では宮殿形式が対象となる—とその基本的な特徴を見ておく。また、これをダイアグラムにまとめる。

## 8 宮殿形式の検証

各レベルの編成形式と宮殿形式の特徴を比較し異同をまとめ、分析対象から抽出された編成形式を基本的にそなえていたら、変容の過程は、宮殿形式という形式によって規定されたといえる。分析対象のオープンスペースの変容の過程が、上記宮殿形式がそのままか、あるいは変形され適用される過程として説明できることを検証し、さらにその適用の形態の特徴を明らかにする。

なお、ここで言う適用の形態とは、現実の空間の編成が変化してゆく過程において、適用されたとする宮殿形式がどのように変形あるいは変形されずに反映しているか、その状態のことを言う。また、その適用形態が変容を規定すると言うのは、適用された宮殿形式へ向かう傾向・変化、あるいはその形式の特徴から逸脱しない範囲で変化する傾向が変容を通じ繰り返し現れることを言う。

また、一連の時期の変容が特定の適用の形態によって規定されている場合、その時期を他の時期から区別することができる。大学空間のように集合形態の長期間に亘る変容全体は、そうして得られた適用形態の一連の変化として捉えられる。

検証過程の詳細は以下の通りである。

1) 上記5で抽出した編成形式を宮殿形式の基本的特徴と比較する。両者に相違点がなければその型は宮殿と認められる。また、相違点があれば宮殿形式の変形として捉えられるか検討する。宮殿形式の変形としての捉え方が認められるのは、その変形を仮定することにより様々のレベルで生じる相違点を一貫し単純に説明しうるような場合である。以上をまとめ、変形の関係を含めた宮殿形式の適用の形態をダイアグラムにする。

2) 最後に各レベルの変容を規定する編成形式の間の相互関係を明らかにし、全体として時期毎の変容の過程と宮殿形式との関係を明らかにする。

## 9 対照例の分析

対照例について、同様な観点と手順で分析を行う。主に全体配置の形式、敷地の様態、動線、建物の外部形態などに関する概略の資・史料に基づき、分析はやや簡略に行う。配置の変遷図、変化表、ダイアグラムは必要な範囲で作成する。また、編成の三つのレベルも全体レベルで一括して行う。

#### 10 東大と対照例の比較

東大と欧米の対照例とを比較し、この期の大学空間の形成・変容を規定する空間の編成形式の異同を検討し、東大本郷キャンパスに見られるその固有性—共通性と差異性—を検証する。

#### 1-4 論の構成

本論の構成は、1章で論文の目的、方法、対象など基本的な枠組みを示した上で、2章で大学の空間を広く通観し、クワドラングル、宮殿形式、キャンパスという三つの空間編成の型を説明。特に分析の作業仮説となる宮殿形式の基本的な特徴を確認する。3章、4章で東大本郷キャンパスの分析データなどの確認と分析を行う。続く5章では、同時期の類似した施設内容をもつ欧米の主要大学のいくつかの実例を概略分析し、6章で対照例と本郷キャンパスの分析結果を比較し、東大の変容の固有性などについて結論を導く、という形になっている。各章の概要を添えた構成を以下に示す。

##### 1章 序—背景と目的、対象、方法

##### 2章 大学の空間類型

—大学の空間における三つの代表的な編成形式であるクワドラングル、宮殿、キャンパスを概観し、その特徴をまとめる。

##### 3章 東京大学本郷キャンパスの形成過程

—分析の前提として、本郷キャンパスの空間の形成過程を確認する。併せて、大学の組織上の変化も概観しておく。

##### 4章 本郷キャンパスの分析

—東大本郷キャンパスの空間的な骨格が形成されたプロセスを分析し、その過程が宮殿形式の適用・変容の過程として説明できることを明らかにする。具体的には、本郷キャンパスの形成過程には三つの時期と三つの適用のパターンが見られる。各々の適用パターンの特徴と意味を明らかにする。

##### 5章 対照例の分析

—本郷キャンパスとはほぼ同時期に展開を遂げた大学空間の中から、文化的背景、歴史的背景の相異なる幾つかの例を挙げ、分析を行う。この期の大学空間の変容が宮殿形式とその変容として説明できること、典型的な宮殿形式には三つの適用のパターンがみられることを明らかにする。

ベルリン大学、ボローニャ大学（参考例；ベルリン工科、ストラスブール大学、ボローニャ大獣医学部地区）、ケンブリッジ大学ダウニングサイト地区、パリ大学ソルボンヌ校、ローマ大学都市地区（参考例；マドリッド中央大学）、テキサス大学オースチン校、ハーバード大学ノースヤード・ホ

## 6章 東京大学本郷キャンパスの特徴

ー4、5章の結果を踏まえ、本郷キャンパスの形成過程は、宮殿形式の一貫した発展、変容の過程を示す希な例であること、宮殿形式が、近代大学の空間の求める基本的条件に合致したことなどを明らかにする。

## 2章 大学の空間類型

### 一概要

この章では、成立の時代的、地域的な背景が多様な大学空間の事例を通観することにより、大学の空間編成に見られる三つの代表的な形式ークワッドラングルと宮殿形式、キャンパスの三つの型を理解する。先にも述べたとおり、本論は宮殿形式を固有の形態と特性をそなえたオープンスペースを編成する一つの形式として定義し、それによって本郷キャンパスならびに欧米の幾つかの対照例の大学空間の変容過程を説明しようとするものであり、大学空間全般にわたってその編成形式の類型を歴史的に論証しようとするものではない。従って、ここでは宮殿形式と対立する他の型については、宮殿形式との違いを理解するために必要な範囲でその基本的な特徴をとらえておく。又、ここでいう型はある時代に完成された形式というより、変容を通じ幾度も反復される形式上の特徴のことである。従って編成形式は典型例にみられる変容の過程から抽出されるものであると同時に、変容の過程がそれによって規定されるとも云える。

## 2-1 クワドラングル

### 一定義、起源

一般的な定義としては、矩形の中庭を建物が囲む建築の構成形式、あるいはその囲まれた中庭のことである。大学空間としては、中・近世の膨大な現存例をもつイギリスのオックスフォード大学とケンブリッジ大学のコレジクワドラングルが代表例で、多様な展開を見せる。大学の空間形式としては、13世紀ごろに成立したと言われている。中でもオックスフォード大マートンカレッジのモブクワッドが最古と言われ、その後同大ニューカレッジ、ケンブリッジ大のコーバス・クリステイカレッジなどで計画的に作られた<sup>8</sup>。

クワドラングル自体はヨーロッパ大陸でも広く分布していたが、学寮制が消滅してゆく過程で、その重要性も失われてゆく。南欧のイタリア、スペインなどに往時を偲ばせるものが残っているが、大学の共同性から生活の側面が抜け落ちた現在、その多くは大学の中の一部機能を占めるのみで、管理部門や記念館的な用途に使われているものが目に付く。中庭も回廊形式（クロイスター）であったり、統一したサーキュレーションを持つ完結性が強いものである。南欧系の例としてサラマンカ大学、エスクエラス・メノーレスを挙げておく。一方イギリスなど北欧系のクワドラングルでは基本的に建物は階段室型のアクセスを備えることが多く、各辺の棟は分離できる構造であった。

図2-211

この北欧系のクワドラングルはアメリカに渡り、大きく変化する。中庭を囲む各辺の建物が分離され、中庭の四隅が開放される。後のキャンパスの項で見ると、この形式はボストンのハーバード大学にその典型が見られる。ここでは、基本的にキャンパス全域に通底する田園的な特性のオープンスペースを建物によって破壊しないため、オープンスペースを明確に手前と向こう側に区切ってしまう閉鎖的なクワドラングルを文字どおりオープンにしなければならなかった<sup>9</sup>。

図2-12

### 一編成形式としての特徴

図2-1

大学の空間としてはケンブリッジ、オックスフォード大学の諸カレッジが中世以来保持し、展開してきたものが最もよく知られている。その多くは現在もそのままカレッジの施設として使われており、ここではそうしたカレッジに見るクワドラングルを中心に特徴をまとめる。

オープンスペースとしては、中庭が建物によって概ね三側面以上囲まれ、比較的明確なまとまりをなす。建物周辺に広がるオープンスペースは、塀などで境界を区切られ独立的であった。構内全体はそうしたオープンスペースが複数集合したもの、あるいは全体がそうした独立した諸部分に分割されたものと見ることができる。一貫している特徴は自律的なオープンスペースの基本単位が接合された形態ということである。

クワッド内の中庭は建物によって囲われ明確に規定される反面、街側の外部に対しては閉鎖的である。近世以降、ことにケンブリッジでは街路に面した側の建物が除かれることが普通になったが、その多くは比較的高い塀で囲われたままで、空間的には開放されたとは言えない。

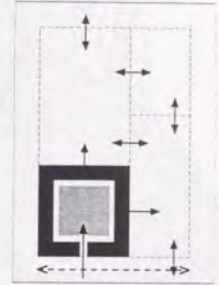
オープンスペースの特性としては、クワッド内は最初、庭-gardenとして形成された。しつらえも樹木を含んだ柵で囲われた植栽が施される庭園的なものであったが、順次撤去され、現在見るような、柵のない地覆いの植栽だけになった。現在も植栽はあるが、建物へのアクセスが開き、外からのメインアクセスの動線が最初に入る表のオープンスペースである。

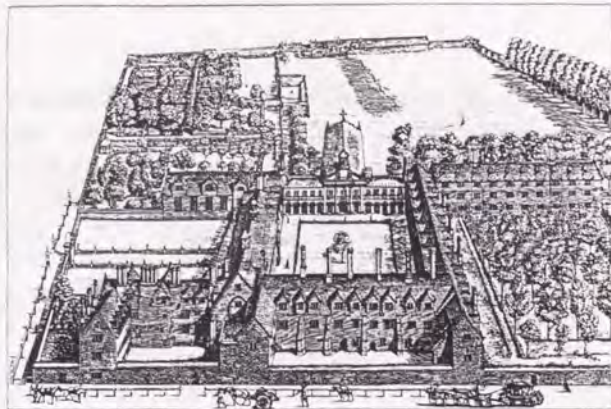
その他としてclose, pieceなど建物周辺には囲われた土地があった。語源としてはほぼ庭と同義であり、田園的な風景の場であった。それらは次第に実用目的あるいは特殊な用途—果樹園、菜園、薬草園、養魚池など—として編成されてゆく。kitchen garden, meadow, fishpondなどがそれで、17世紀末以降は、walk, gardenなどリクリエーションなど実用以外の観照的な用途も現れる。

典型的な例はケンブリッジおよびオックスフォード大学の多くのカレッジに見られる。

クワドラングル

2-1





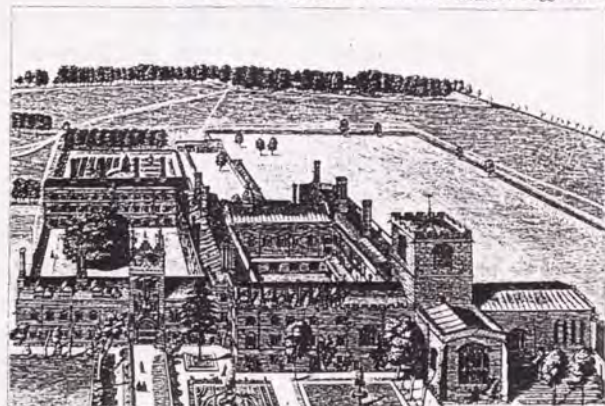
2-2 ケンブリッジ大学エマニュエルカレッジ, Logan版画, 1688



2-3 エマニュエルカレッジ, Hamond版画, 1592



2-4 ケンブリッジ大学ジーザスカレッジ配置図, Logan版画



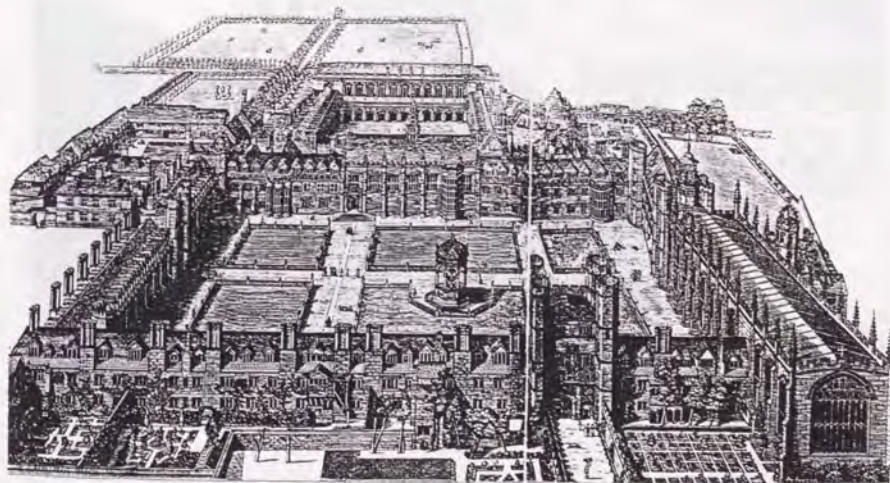
2-5 ジーザスカレッジ, Logan版画, 1688



2-6 ケンブリッジ大学セント・ジョンズカレッジ  
Logan版画, 1688



2-7 セント・ジョンズおよびトリニティカレッジ配置図  
Logan版画, 1688



2-8 トリニティカレッジ, Logan版画, 1688



2-9 オックスフォード大学マートンカレッジ  
モブクワドラングル



2-10 エマニュエルカレッジ



2-11 サラマンカ大学エスクエラス・メノーレス



2-12 ハーバード大学、1726、William Burgis版画



2-13 ケンブリッジ大学ゴンヴィル・キースカレッジ  
名誉の門、1575



2-14 エマニュエルカレッジ裏庭

2-15 トリニティカレッジ、バックス





## 2-2 宮殿形式

### 2-2-1 原型

#### 一定義、起源

直接的には近世フランスの宮殿を範とする空間編成の形式。17,18世紀のバロック宮殿を淵源に持つ。バロック宮殿の典型の一つであるヴェルサイユ宮殿などパリ郊外に建てられた宮殿は、都市と自然の境界に成立し、都市宮殿と自然の中の離宮の二面性を備えたガーデンパレスであった<sup>10</sup>。都市側に母屋で三側面を囲まれた壮大な前庭を作り、都市空間を引き込む。母屋の背後は軸線が遙か遠くまで貫通する庭園が続く。母屋自体は一貫した様式で統一され、その多くには厳格な相称性がある。そして軸線によって母屋が区切る都市側と庭園側の二つの領域は統合され、ひいては、敷地全体が母屋から発する軸によってその起点に結びつけられ、一体的なまとまりを作る。例としては、メゾン宮殿 (Chateau de Maison-F.Mansart, 1646)、ヴェルサイユ宮殿 (Chateau de Versailles-L.L.Vau, 17-18世紀)、マルリー宮殿 (Chateau de Marly-J.H.Mansart, 1679) などが挙げられる。

図2-18'23

そうした宮殿は、その後ヨーロッパの王が所在する主要都市で多く建てられるが、大学の建築としてこの形式が用いられたのは1810年に設立されたベルリン大学 (フンボルト大学) が嚆矢である。これは、もともと18世紀に皇太子宮殿として建てられた建物 (1748-1765年) で、文字どおり宮殿であったものを改装して大学とした。この建物は、大学が都市の枢要な広場を作るという面でも画期的であった。

図2-25

その後、この形式ははじめから計画的に大学独自の建物として建てられてゆく。代表的な例としてヨーロッパではストラスブール大学 (1870年) やベルリン工科大学 (1884年) などが挙げられる。これらは枢要な街路などに面し巨大な母屋を置き、一方、前庭の深さより背後の庭園部を大きくとるのが特徴である。

図2-26,27

宮殿形式はその都市的な前庭が基本的な要素の一つであるが、大学構内ではなくその前面の都市空間の中に前庭を設定する場合もあった。多くは都市改造の際に大学建物の新築がなされた場合に見られた。19世紀後半の都市改造が行われた代表的な二都市、ウィーンとバルセロナの大学 (各々1884年、1868年) はその典型である。また、オテル・クルニューとの間に都市公園を

挟んで建つパリ大学のソルボンヌ校の改築(1901年)もこれに当たる。

図2-28,29

この他、19世紀末から20世紀にかけ、多くの大学でこうした宮殿形式が採用される。ことに、この形式の原型と見なせるベルリン大の規模を半分程度のサイズに縮小し (ベルリン大はファサード幅約150mに対したとえばポローニヤ大解剖学研究室-1901年およそ80m程度)、奥行きの高い前庭も浅く、場合によっては単なる母屋両端の突出部程度にまで矮小化した「小宮殿」を、専攻分野ごとに一つずつ割り当てると、その変形された形態まで含めるならこの期の大学施設の建設に当たってイギリスからイタリアまで広く普及する。そして後に見るように、こうした「小宮殿」による建設は、歴史的にはケンブリッジ大学やポローニヤ大学とほぼ同時期、当時の東京帝国大学が経験しつつあることでもあった<sup>11</sup>。大学にもよるが、小さいとはいえ母屋の背後はその専攻の自由になる内庭があったし、また実際のところ新しい実験室のためにそうした増築がいつ必要になるかわからないのがこの期の大学の研究室であった。

図2-31'35

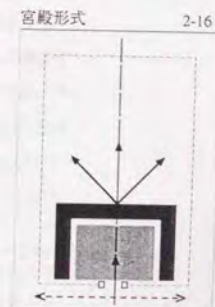
アメリカにもこの形式は早い時期に渡った。アメリカでの宮殿形式の原型はベルリン大学の創設とほぼ同じ時期、19世紀のはじめに作られたヴァージニア大学がそれである<sup>12</sup>。しかし、ヨーロッパと同様、この形式が型として反復して使われるようになるのは、やはり19世紀末からである。

図2-30

#### 一編成形式としての特徴

図2-16

宮殿形式では一貫性のある外部形態をもつ母屋が、街路や広場など都市的な空間に面し建つ。前庭は都市空間に面し、透過性のある塀によって仕切られるのみで連続する。それは三側面を連続的な形態の母屋に囲まれ、明確な中心性を示す。すなわち前庭が大学の内部の共同的なオープンスペースを形成すると同時に、それが大学の外部にまで連続し、あるいは外部の都市的空間が大学内部に導入される。また構内全体は軸によって前庭というオープンスペースを中心とする領域に統合される。構内における唯一の明確なまとまりをなすオープンスペースの基本単位となっている。母屋の背後には庭園が広がる。前庭は幾何学的に整序された外構がなされ、背後の比較的植栽が密になされた庭園と対比される。前庭、母屋、庭園を貫く軸性があり、全体は統合されている。これを整理すると、



1) 構内全体領域の一体性；比較的明確な境界、強い軸性により全体領域は一つのまとまりをつくる。

2) 都市と自然という二領域性；囲まれた都市的オープンスペースと連続的に拡張する庭園的オープンスペースという二つの相異なる特性のオープンスペースが共存する。

3) 軸性による統合性；全体領域を貫通する軸によってオープンスペース群、建物が統合される。

4) 前庭の囲繞性；前庭は建物によって三側面を囲まれる。

5) 前庭の都市性；前庭は前面の都市空間と面的に連続する。

6) 一貫性のある建築形態；前庭を囲繞する連続形態を形成する。

この六つの特徴にまとめられる。

この形式では一般的な意味での増築は庭園側で行われる。計画段階から付属屋がある場合は庭園側に展開する。結果としてそれまで前庭がオープンスペースの明確なまとまりをなしていたが、庭園側でも建物に囲まれたまとまりを形成してゆく。その場合、大学の内部の相互交通が庭園側で行われるようになると、前庭とは別に、そこに新たな中心性を備えたオープンスペースが生まれる。それは、庭園的な特性を維持するオープンスペースか、必要に応じて付属屋の展開する裏的なオープンスペースと化してゆく。このオープンスペースはもともと表側の前庭や都市空間とは直接連続しないため、変容の進展に伴い、相互に独立したオープンスペースの基本単位とそれを囲む編成領域を形成する。

都市に直結する前庭と庭園側の空間を各々、広く表と裏という一般的な特性として考えると、宮殿形式は表と裏の二領域を維持し、母屋とそれらを貫通する軸によって統合し、一体的なまとまりを保つように変容してゆく。又、表・裏の両面で展開をとげる場合は各々が独立の領域を形成してゆくこともある。

## 2-2-2 宮殿形式の変形形態

図2-17

ベルリン大学を大学における宮殿形式の原型と考えると、後に見るよう、宮

殿形式にはそのいくつかの変形形態が見られる。両翼部を短くするなど宮殿形式を単純化したもの、建物を断片化し、表裏のオープンスペースの連続性を作るもの、拡大など規模の変換がされたもの、前庭の比例が変換されたものなどである。これらは、オープンスペースの2領域性とその統合、都市に開かれた前庭など、原型の基本的特徴を大きく変えずに何らかの特徴を加えたものである。以下、それらの例と変形の関係を示したダイアグラムを図に示す。

単純化は最もよく見られる変形形態であり、宮殿形式が集合形態で使われる場合や断片化される場合など、ほとんどがこの形態となる。例も本論で取り上げた分析対象のほとんどのものに見られる。

断片化は一体的な形態の母屋が、単純な矩形平面の建築型に分解され、集合形態として宮殿形式の基本的特徴を示す。ポローニャ大学における一部自然科学系建物の計画案やコンドルの東京大学計画案などにその典型を見ることが出来る。この変形の特徴は、オープンスペース間の連続性を形成する余地が大きくなること、オープンスペースの分割や変形などの扱いの自由度が増すことである。

規模の変換は、ベルリン大学のスケール（母屋の寸法約145m×65m）を基準として定性的に判断すると、拡大例としてはベルリン工科大学が挙げられる。後に見る東大本郷キャンパスの草創期から明治期にかけての主要部の配置形式（大形式）は、断片化と規模の拡大がなされたものと言える。

規模の縮小は多くの場合、形式の簡略化を伴う。母屋の両端の突出部が浅くなり、前庭の囲繞性が弱まる。後に見るように、ケンブリッジ大学やポローニャ大学、明治期の東大などの研究室建物にその典型を見ることが出来る。また、断片化された宮殿形式は基本的にこの変形を受けた要素からなる。アメリカのキャンパス形式では、オープンスペースの連続性を侵さないようにこの簡略化された建物を分散配置する構成が多い。ハーバードでも、テキサスでも見られる共通の特徴と言える。

前庭の比例を変換したものとしては、この簡略化された宮殿形式が典型であるが、ベルリン工科大学やストラズブル大学本館のように比較的大規模な母屋でも見られる。一般に、オープンスペースが建物の集合形によって形成される時、個々の建物の前庭は浅くなる。

以上の他に、これらの変形の複合した形態が存在する。先に挙げた東大の初期の配置形式（大形式）は規模の拡大と断片化、比例の変換などの複合した

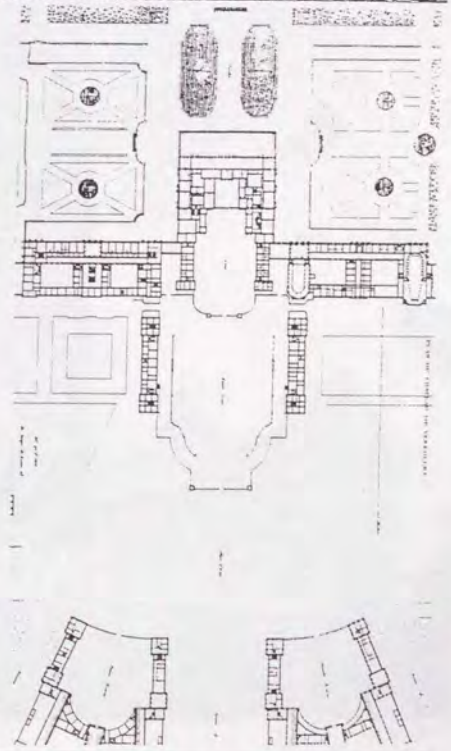
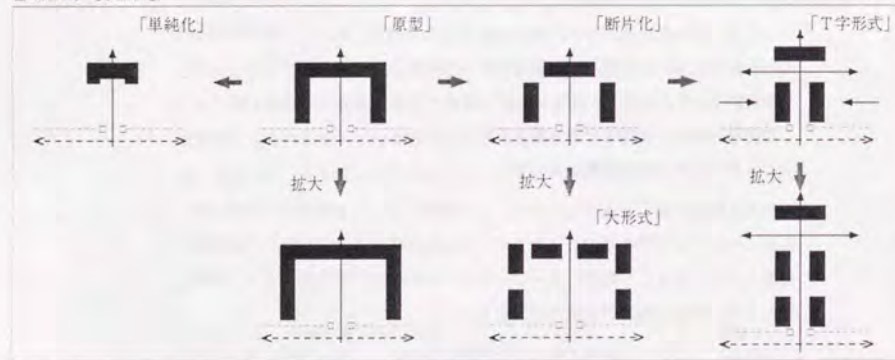
変形の結果と考えられる。また、後にローマ大学や明治期の東大に見るような、断片化と前庭の比例の変換（長軸化）によって宮殿形式を構内に向かって開放的に変形した形式（T字形式）も挙げられる。



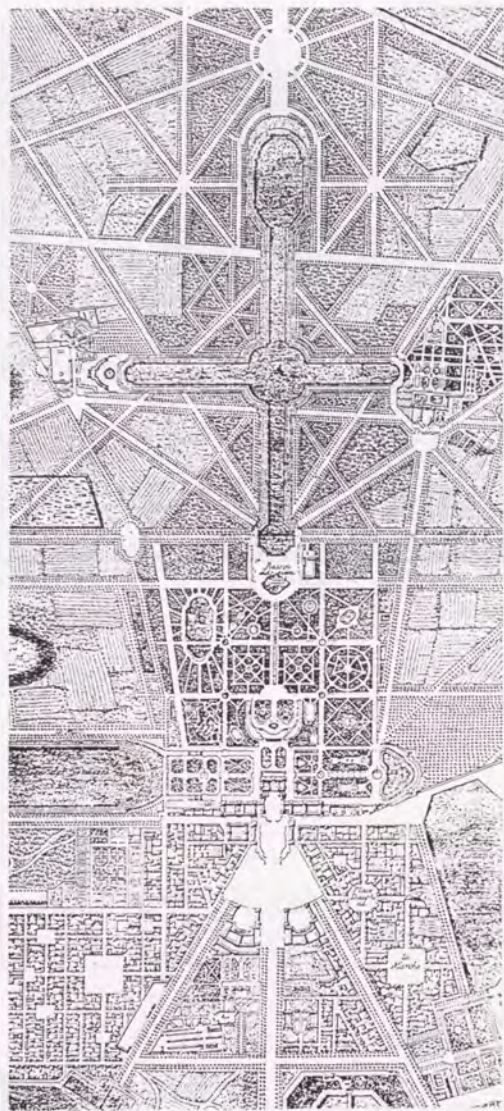
2-18 ヴェルサイユ宮殿、17世紀版画

宮殿形式の変形形態

2-17



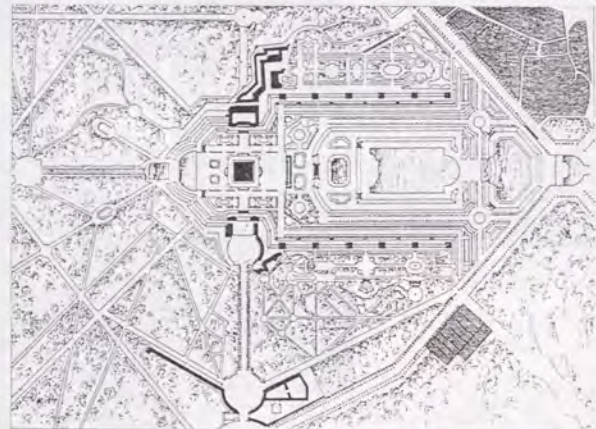
2-19 ヴェルサイユ宮殿平面



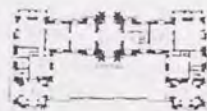
2-20 ヴェルサイユ宮殿全体配置、17世紀版図



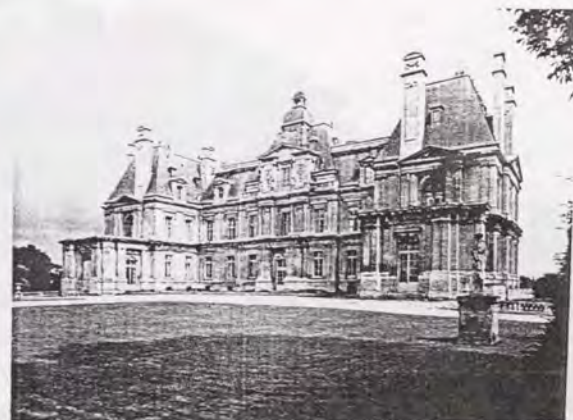
2-21 マルリー宮殿、1679、17世紀版図



2-22 マルリー宮殿配置

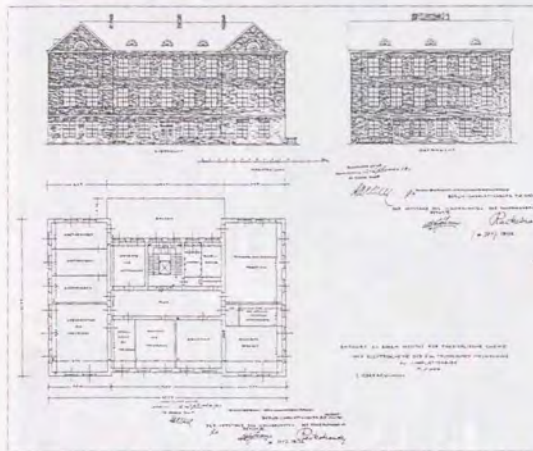


2-24 メゾン宮殿平面



2-23 メゾン宮殿、1646





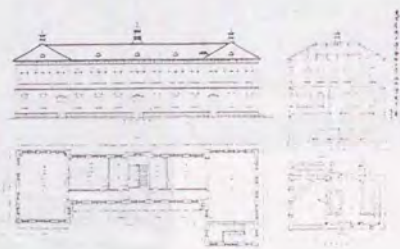
2-32 ベルリン工科大学物理化学電気化学研究棟、1913



2-33 ポローニヤ大学病理学研究棟、1920年代



2-34 東京帝國大学解剖学教室



2-35 同大病理学教室平立断面図

## 2-3 キャンパス

### 一定義、起源

キャンパスはアメリカの大学で形成され、今日においてもアメリカにその多くの典型が見られる空間編成のことである。都市的空間—街路、広場といった、建築群に囲まれ、比較的明確にオープンスペースの境界が決められ、しかも植栽が限定されてしか使われない—に對立する田園的なオープンスペースが構内に連続的に広がり、一体のオープンスペースをなす形式を言う。そこでは建築群は相対的に広大なオープンスペースの中に散開、基本的には圧倒的なグリーン—地覆いの芝や牧草類と高木類の組み合わせが一般的—の連続性と一体性を壊さないように配置される。

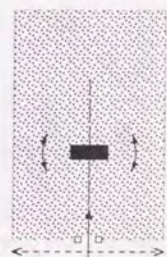
言葉としてのキャンパスはラテン語のcampus—フィールド—に由来する。大学の敷地を指す言葉としては、1774年にプリンストン大学の学生に使われたのが最初であったという<sup>13)</sup>。その後、大学の校地全体がキャンパス的な一つのオープンスペースをさすようになる。アメリカの大学空間の多くに通底するオープンスペースの特質であり、現在でもアメリカの大学校地の呼称となり定着、実際、アメリカの大学空間の多くはこのキャンパスの特性で満たされている。P.ターナーは当時のプリンストンの「オープンで半ば田園的な環境の表現としては完璧である」<sup>14)</sup>と言っている。これ以前に使われていた言葉「ヤード」に比し、ラテン語である分学問的に閉こえたこともあり、19世紀を通じて定着してゆく。また、戦後はアメリカの国外にも広がった。

原型としては、言葉の発祥の地であるプリンストン大学、ことにナッソーホールを中心に配置したもとの編成形式が挙げられる。この型は、広々としたオープンスペースのまっただ中に完結的な形態の建物が孤立して建つ形式で、その後のアメリカの大学空間の編成で繰り返し用いられた。

図2-40<sup>14)</sup>

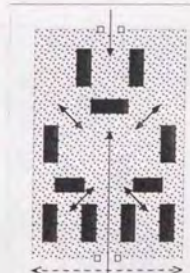
キャンパスと言う分類はアメリカの大学空間という大分類に相当するもので、建物の配置形式をクワッドラング的にするか、あるいは宮殿的にするか、あるいはそれらの組み合わせとするかは、いずれもキャンパスという形式の下位分類の問題である。P.ターナーはこの“Campus”という言葉にあらわれた概念をもってアメリカの大学空間の特質とみなす。キャンパス形式のそうした類型の代表的な型としてはクワッド系（ハーバード、イエール）、宮殿系（ヴァージニア、テキサス）などがある。また、「コテージシステ

キャンパス 2-36



ナッソーホール

2-37



クワッドラング系

ム』と言われる起伏に富んだ田園的なオープンスペースの中に独立した形態の建物が散開する配置形式も（ミシガン州立大の最初期に開発された地区など）、このキャンパスという編成形式のみが可能とした独特の大学の空間であった。

図2-43'46

一編成形式としての特徴

図2-36'39

キャンパスは田園的なオープンスペースと建築群による一体的な空間編成を特徴とする。構内全体の一体性においては宮殿形式と変わらないが、オープンスペースの特性が田園的な特性で一貫する点が異なる。

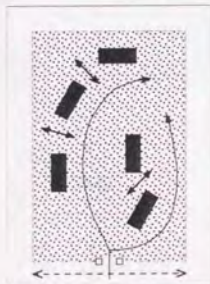
プリンストンのナツソーホールは、それらに共通するキャンパスというオープンスペースの編成形式の原型を示す。この他の代表的な下位分類として、先に挙げたクワッド系と宮殿系がある。

クワッド系としてはハーバードのヤードシステムと呼ばれる例が典型である。相互に分離された完結的な形態の建物が、さほど大きくないオープンスペースを囲み、それを単位として、より大きなまとまりを形成してゆく。オープンスペースはクワッドの対角方向が開放されているので、緩やかに次のオープンスペースへと連続的に拡大する。（これを比較的閉鎖的な中世来のクワッドラングルに対し、オープンクワッドと呼ぶことにする。）結果として田園的なオープンスペースが構内全体に連続し、一体となった領域がつけられる。

宮殿系のキャンパスでも、キャンパスの特徴からオープンスペースの特性に二領域性は見られず、一貫して田園的な特性のオープンスペースが広がる。この型の発展した形式として19世紀末から20世紀前半にかけ、アメリカン・ボザール派による多くのキャンパス計画がなされた。軸構成によって巨大なキャンパスを統合しようとするもので、ローマ大学やマドリッド大学など、ヨーロッパの宮殿形式の発展形態としての「キャンパス」タイプの大学にも影響を与えたと思われる。構成の単位となるオープンスペースのまとまりは、上で見たオープンクワッドに類似し、オープンスペースの入隅を開放し、緩やかに隣接するオープンスペースのまとまりにつながってゆく。

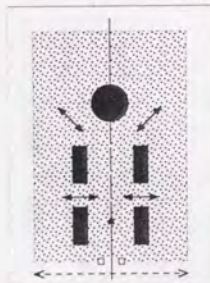
両者とも、基本的にもととのクワッドラングルと宮殿形式の特徴に類似した特徴が多々見られるが、いずれもナツソータイプ-広いオープンスペースに孤立して建つ独立建物-を基本としたオープンスペースの形成が共通する。

2-38

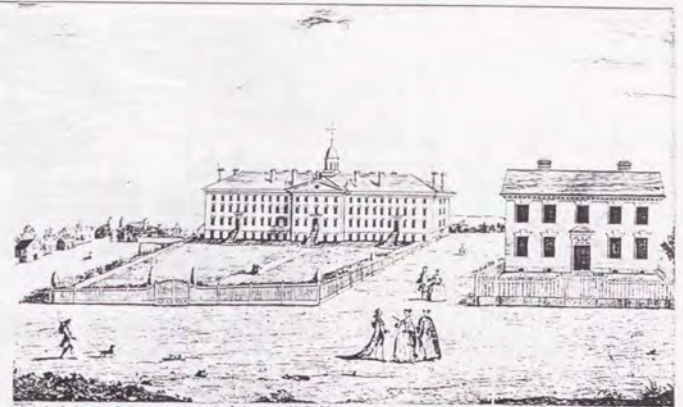


コテージシステム系

2-39

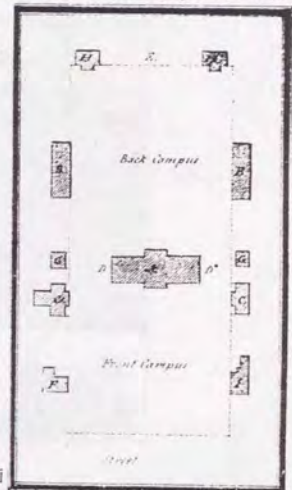


宮殿系



2-40 ニュージャージーカレッジ (プリンストン大学)、1764、Henry Dawkinsの版画

2-41 同大平面、1836、Joseph Henry

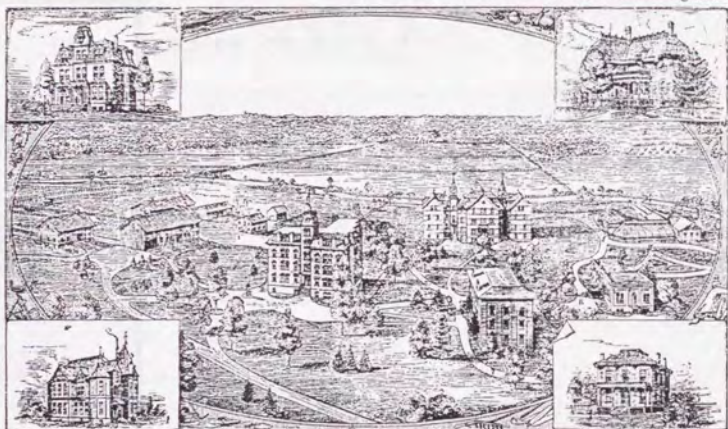


2-42 ロードアイランドカレッジ (後のブラウン大学)、1790版画





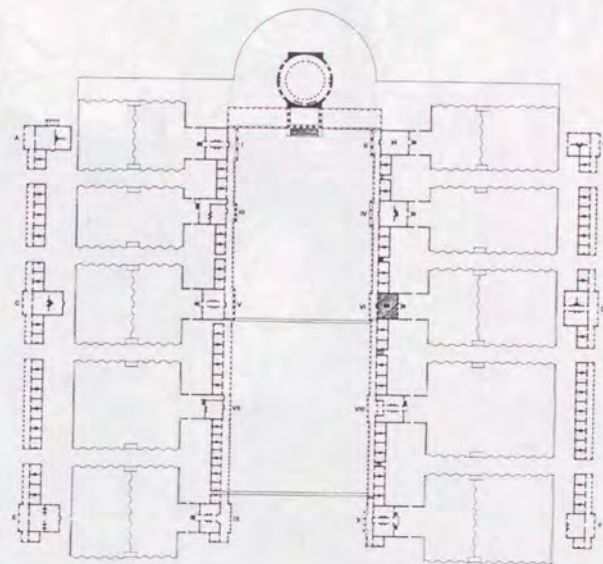
2-43 ハーバードカレッジ、1726、William Burgis版画



2-44 ミシガン州立農科大学、1870年代



2-45 同大全体配置、1875



2-46 ヴァージニア大学平面、1817、Thomas Jefferson



2-47 プリンストン大学  
ナッソーホール周辺



2-48 イェール大学オールドヤード



2-49 ワシントン州立大学歴史的地区



2-50 ワシントン州立大学



2-51 ミシガン州立大学

2-52 ヴァージニア大学



### 3章 本郷キャンパスの形成過程

#### 一概要

この章では、本郷キャンパス分析の前提として、その形成の過程を明らかにする。本論の主旨は、建築群と敷地が一体となり形成するオープンスペースの形態を通して、大学全体の空間編成を理解することである。従って形成過程の記述も、建物、外構、植栽などオープンスペースの形態と特性、それらの変化に関する事実を中心に挙げる。また、空間の変容の背景として、分析の対象となる時期における東京大学の組織、制度などの変化について、その概要をつかんでおく。

第一に、形成過程において5つの時期が区分されることを見る。第二に、各々の時期についてオープンスペースを規定する諸要素に関しその期間に意味ある変化がみられる段階を選び、各々について、その変化、及びその内容について記す。

第三に、その時期の変化に関係する計画案、関連事項をみる。

本郷キャンパス全体の形成史については、既往の研究<sup>15</sup>により大筋は明らかにされている。しかし震災以前に関しては、オープンスペースの計画も含めた全体の構想、計画理念、あるいはコンドルの構想などとの関係も明らかでない。また、震災後の内田祥三による計画整備の過程についても、震災以前の計画・建設との関係を含め、詳細がつかみづらくなっているとは言えない。したがって本郷キャンパスの形成過程に影響したと思われる全体計画について、その計画内容と影響関係などを明らかにする。実際の形成過程の把握の参考として必要な範囲でこうした計画案を理解する。

本章で扱う時間的な範囲は、明治10年の東京大学の発足から今日までのおよそ120年にわたる期間である。ただし昭和30年代以降の展開については、本論で直接考察の対象としないこと、既に概要が明らかにされていることなどから、素描にとどめる。(以下、日本の年号の表記は、明治はM、大正はT、昭和はSと略記する)

### 3-1 資料

各建物の竣工年は、既に基本的な文献等で明らかになっている<sup>16</sup>。各年代の配置についても、草創期や戦争の混乱期などを除き大学から毎年発行された本郷地区の全体配置図によってほぼ明らかである。さらに精細に確定する必要がある場合は、設計図書類など他の史・資料によって確定する。また、オープンスペースの様態については、上記資料の他、残された写真資料によって判断する。

現存する写真資料が限られている大学草創期から明治30年代までなど、オープンスペースの様態を判断するための資料が不十分な場合がある。そうした場合は、それによって補われた過程が統一的で単純な説明を可能とするような推断を行う。

計画案に関しては、史料は限られている。具体的にはコンドルと内田祥三のものである。前者はオリジナルの図面等が失われており、二次的史料による考察となる。後者の計画については残っているものはよく整理されている。他にも本郷キャンパスに関わる計画があるが、分析の対象とした時期の中では実際に大きな影響を与えたと思われるものはない。

考察の基礎とした本郷キャンパスの空間形成及びその空間の様態に関わる資料には次のような三つの系統がある。

A) 大学所蔵文書、計画・設計資料類 B) 内田祥三教授関係資料 C) 書籍・雑誌論文・その他公刊資料

収集したものは、本論の分析対象となるキャンパスの建物と外部空間などについて、その全部か一部を直接示すもの、それらの状態や整備の状況、建物の竣工年などを記述し、あるいは類推させる資料である。具体的には構内全体の配置形式、建物の外部形態、外構の様態、外部の主要動線、構内の境界の様態と周辺環境などに関するものとなっている。

なお、A資料 施設部所蔵設計図書関係原本は伝承形態から内容は疑いようがない。公文録なども同様。構内配置図は信頼性が高いが、細部の信頼性ことにスケールは確実性欠く。とくに草創期については、建物竣工年についても不確実な点がある。各建物の工事、竣工、中断などの時期確定は必要に応じ、年表、参考文献などを参照する必要がある。B資料もA資料に準じる。C資料の内当該事項の同時期に発行された文書類は確実性が高いと考え

られるが、他資料との食い違いなど問題ある時は別に評価を加え、他と総合して判断する。

以下に、本論で参照した史資料の一覧を掲げておく。

- 1) 全体配置図（施設部）；形成過程判断の基礎資料。基本的に東京大学、東京帝国大学、医学などの「一覧」（以下大学一覧と総称）所載の配置図と施設部所蔵の本郷田地施設配置図。縮尺および配置が正確でないことがある。
- 2) 東京帝国大学土地建物調（施設部）—M36,40,42；明治期の一部について、全体配置と各建物の概略平面図、面積などを記したのもの。
- 3) 大学一覧—東京帝国大学一覧、東京大学一覧、医学部一覧・明治19-20年以降—  
（図書館、大学史料室、図書館資料室、医学部図書館）；資料1)の一部の原本に相当。縮尺は不正確なものあり。印刷原稿は未確認。構内風景、建物写真あり。
- 4) 新営工事設計図書（施設部）；各建物の設計図書類。外構は周辺のみの場合が多い。建物の計画・設計内容の確定のための基礎資料。設計計画、建物整備の厳密な年代確定はこれと工事記録、竣工記念などの記録が基礎。
- 5) 新営工事記録写真類（施設部）；写真帳の体裁であるものがほとんど。日付あるもの多く、撮影当時の構内の状況を知る上で価値あり。
- 6) 竣工写真類（施設部、附属図書館史料室）；同上
- 7) 竣工記念写真帖—安田講堂、図書館、工1号館（施設部、建築学科）
- 8) 小川一真、東京帝国大学、明治33年（建築学科、小石川植物園）；バリの万国博覧会出品のため撮影したものを、配布。明治末のキャンパスの全般的な状況を知る上での基礎資料。
- 9) 同上、東京帝国大学1904、明治37年（明治新聞雑誌文庫）；8)の内容を新しいものに一部入れ替えた版。
- 10) 東京帝国大学50年史；建物年表の他、明治20年代前半と思われる構内写真あり。
- 11) 東京大学100年史；建物竣工時期他、各種年代の基礎とした。
- 12) 東京大学医学部100年史（図書館）
- 13) 各学部卒業記念アルバム—法科、医科ほか（大学史料室、医学部図書館など）；各科大学の施設詳細がわかる資料あり。

- 14) 震災アルバム—英文、震災前後比較記録写真帖—(附属図書館史料室)；現存しない明治期の建物、キャンパスの状況などについて比較の詳細が推察できる。
- 15) 震災被害調査記録写真(建築学科図書室)—約600枚、東大関係20枚前後；同上
- 16) 工科大学写真(建築学科歴史研)
- 17) 東京帝国大学医学部病理学教室50年史(図書館)；医科大学当時の詳細が一部わかる。
- 18) 東京帝国大学医学部法医学教室53年史(図書館)；同上
- 19) 東京大学その百年、昭和35年
- 20) 東京大学の百年、1877-1977、昭和52年
- 21) 小寺氏撮影写真、昭和34・35年頃；高度成長期直前のキャンパスの状況。
- 22) 各建物等写真乾板  
 - ガラス乾板約3,500枚(施設部、大正末期以降撮影)；震災以降、昭和10年代までの工事記録写真と被災状況の記録が大半。一部戦後撮影のもの(昭和30年代ぐらい(医学図書館など))も含まれる。
- 23) 内田祥三関係資料(都公文書館、大学資料室)  
 - 東京帝国大学工学部所属建物略設計図、大正12年5月  
 - 震災前の「整備計画」の一端  
 - 東京帝国大学法、文、経所属建物略設計図、大正12年5月  
 - 東京帝大復旧計画 其貳 学内決定案迄、大正12年10月案  
 - 復興計画、大正12・13年、大正12年10月、11月案  
 - 「図書館復興計画」、大正13・14年；当初二案あり。  
 - 内田座談会記録(昭和43年)  
 - 各種構内写真
- 24) 内田図面(建築学科図書室)—主にショウドロー。各建物中心。全体計画なし。
- 25) 帝大新聞における内田祥三、岸田日出刀、柘植芳男の記事、談話(詳細は巻末参考文献参照)
- 26) 各種記録写真(図書館、大講堂他)ほか構内写真(紙焼数十枚)
- 27) 東京都市地図・1(柏書房、貝塚爽平監)

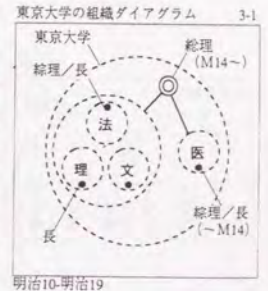
### 3-2 東京大学の組織編成、大学の理念における変化ならびに関連年表

ここでは、新制大学が発足するまでの期間における本郷キャンパスの変容の背景となった組織編成、理念上の変化と特徴を概観する。東大<sup>17)</sup>の歴史は上記の点に関し、以下のような三つの時期にまとめられる<sup>18)</sup>。尚、新制大学以降は、本論の分析と直接関係ないので省略する。

第一に、専門学校の連合体としてあった時期。大学としての理念を欠いた時期である。

図3-1

形式的には、M10の東京大学の創立から、M19の帝國大学設立までの期間である。「東京開成学校東京医学校ヲ合併シ東京大学ト改称」(文部省布達第二号 M10年4月12日 百年史・通史一、P.411)というだけの設立主旨に現れているように、特定専門分野の教育だけを目的とした専門学校が連合した、いわば名ばかりの大学であった。総理と称する大学の長は、大学において「事務を掌理する」文部省職員としてまずあり、法理文と医の各々に一人ずつ任命された。

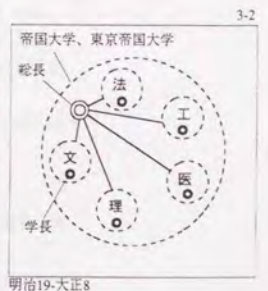


この間、M14には統一的な管理制度がしかれ、一体となった大学へむけての動きも見せる。二人の総理に代わり一人の総理がおかれ、また、各学部には長が任命されるなど、管理制度の一元化がなされる。しかし、依然として大学としての理念にとほしい大学であった。

第二に、近代的な大学として整備されてゆく時期。この間、技芸の教育のみでなく学問を研究する場としての大学という自覚が形成され、そのための体制が整ってゆく一方、分科大学制により学内の割拠性が強まっていった。

図3-2

M19の分科大学からなる帝國大学の発足から、T8、学部制の総合大学ができるまで期間である。はじめに、帝國大学令において、学問(學術技芸)の教育(教授)とその蘊奥を研究(攻究)することが大学の理念として掲げられる。すなわち、ここでは教育と研究の両方を行う場としての大学という近代大学の理念を確認する。教育と研究に対応する大学組織として各々、分科大学と大学院を想定していたと言われる。



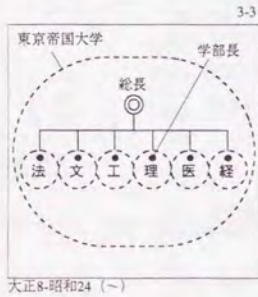
しかも、産業化の進展をにらみ、工学、農学の各分科大学もとり込み、実学の重視も行うという柔軟性も併せ持っていた。

総長、評議会、教授会など管理運営上の枠組みが整備される一方、大学の自律的な管理権限は弱いままでおかれた。教官は各分科大学に属するのに対し、総長は文相に任命される行政職員であり続けた。教授会もまた管理権限

の弱いものであった。

この間、M20年代後半から30年代にかけ、文相・井上毅によって講座制、分科大学教授会の法制化、教官待遇の改善など、大学自治と専門化の推進という大学の近代化が具体的に進められ、今日まで続く近代大学としての東大の基本的体制が実質的に整えられたといえる。それは一方で分科大学の相対的な自立性を強めることになった。分科大学の教授会が人事権を獲得してゆくのもこの時期である。

第三に、総合大学として再編される時期。制提性の強い分科大学制を改め、学部からなる総合大学として再編される。



前年に施行された大学令と帝國大学令の改正を受けた形で始まる。T8から新制大学 (S24) の発足まで続く。新制以降も総合性をめざす点においては変わらないが、教養学部という形で、戦前の後期中等教育を包摂したことが異なる。

この総合大学という理念は明治末年頃からおこった議論を背景に持つ。それはドイツの近代大学の理念で言うところの「学の総合性」を重視し、大学としての水準を保とうとするものであり、また、一つの大学の中に分科大学というかたちで大学と呼ばれる別の組織があるという矛盾を解消するためのものであった。専門分化が引き起こす弊をただし、これまでと逆に緩やかな独立性を確保した学部が統合され、一つの学の府としての大学を形成するという図式になる。

これはまた、当時の私学を中心とする高等教育拡大論に対する、大学の質の低下を恐れた官学側の抵抗という意味もあったという。結局、単科大学も例外として認めることにはなるが、大学が学問を総合的に行うものであることを自覚する契機となった。

総合大学にあっては、それまでの分科大学と大学院並列の体制に代わり、教育、研究両者の中心として学部は位置づけられる。従って、大学としては学部の編成がその組織上考えるべきもののすべてであった。

この時期に、管理運営上の大学の自治も確立された。総長は選挙で決定し、学部長も教授の互選となる。教授会は人事他、今日的な意味での大学の自律的な権限を掌握する。

#### 東京大学の組織および本郷キャンパス施設関連年表

上で述べた大学の組織上の時期区分に関連ある事項、および主要な建築関連の事項を合わせ、年表としておく<sup>19</sup>。

明治1年	医学所、昌平学校、開成学校
明治2年	大学、大学南校、大学東校
明治3年	大学閉鎖
明治4年	大学廃止、文部省設置、南校、東校、工部省工学寮、司法省明法寮
明治5年8月	学制発布 (八大学区)
明治6年4月	学制二編追加 (専門学校規定)
同年4月	開成学校
同年5月	東京医学校
同年6月	開成学校校舎竣工 (文部省設計工事)
同年8月	工学寮開校
明治7年11月	東京医学校の移転先本郷決定
明治8年以降	国府台「大学校」計画推進 (文部大輔・田中不二麿)
明治9年	医学校本郷移転、コンドル着任
明治10年1月	工部大学校
明治10年4月	東京大学設立 (東京開成学校と東京医学校合併、予備門、植物園を付置、医法理文学部、「各科を並立し、これを包括し改称する」もので、総合大学でない。二綜理制、法理文綜理；加藤弘之、医綜理；池田謙齋、本郷移転この頃決定か。)
明治11年	農学校開校、理学部観象台、西郷継道の何の中の法文校舎図面
明治12年	教育令布告、コンドル東京帝國大学計画案?
明治13年	法文校舎着工—工部省設計・工事、コンドル担当、音楽取調所竣工
明治14年	統一的管理制度の成立 (総理、学部長職設置学部と予備門の統括)—それ以前は二系統 (医と法文理)
明治15年	観象台は気象台分立し、天象台へ。
明治16年	コンドル東大計画発表 ("the builder" 誌1884.12.)—計画立案はM12年と記載あり。(ただし法文校舎自体か全体計画かは不明瞭)
明治17年9月	法文校舎竣工 (M17年彩色全体配置図)

明治18年 教育令再改正、理学部着工？  
 工芸学部（機械、土木、探鉱冶金、応用化学）  
 工部省廃止、工部大学校文部省移管、東京法学校合併  
 明治19年3月 帝國大學令（M19年全体配置図、大学予備門の分離、旧制高校設置）  
 帝國大學設立（法医工文理5分科大学、総長、分科大学長、評議会）工芸学部、工部大学校合併、学校令改正  
 同年6月 工科大学本郷移転決定  
 同年7月 東京農林学校成立  
 同年8月 工科大学着工（文部省工事）  
 明治21年 理学部星学教室麻布移転、コンドル東大辞職。  
 同年7月 工科大学校舎竣工  
 同年12月 理科大学校舎竣工（文部省建築課長山口半六）  
 明治23年 東京農林学校合併し農科大学、図書館着工  
 音楽取調所上野移転（明治13年より）  
 明治25年8月 図書館竣工、評議官各分科大学長の互選  
 明治26年3月 理学部博物学教室竣工。  
 同年 医学部、病院位置入れ替え構想決定  
 正門一帯の統一的整備  
 明治26～31年 帝大改革（講座制、分科大学教授会法制化、教官待遇改善など、近代大学の体裁形成。文相井上毅の高等教育・大学近代化；実用の重視、大学院の分離）  
 明治30年 東京帝國大學へ改称、京都帝國大學開設  
 明治35年1月 医科大学・衛生、生理、医化学、薬物竣工  
 明治36年 赤門移動（15mほど）、医科大学病理学教室、工科大学・造船・造兵（明治37年焼失）、本郷通り沿いの樟並木整備  
 明治37頃～ 医科大前坂道の樟並木、本郷通り沿いの堀の整備  
 明治38年 医科大学移転おおむね完了（事務室移転）  
 明治39年 工科・造船・造兵改築竣工、医科大学・解剖、法医、薬竣工  
 明治40～41年 正門銀杏並木整備（M41年確認、伝浜尾総長－M30-31、T1-2 総長在任）  
 明治45年 正門竣工  
 大正3年 法科大学・八角講堂、工2前の樟並木整備  
 大正5年 理科大学・化学教室

大正7年 大學令（学部構成、総合大学構想）、航空学科設置  
 大正8年 学部制、法、医、工、文、理、農に経済新設  
 大正9年 航空学科仮教室  
 大正10年 安田善次郎大講堂寄付申し入れ  
 大正12年2月 大講堂着工  
 同年 工学部2号館、列品館、法研など震災前諸計画案  
 内田祥三営繕課長就任  
 同年9月1日 関東大震災  
 同年10、11月 内田祥三東大全体計画3案（12年10、11月）  
 大正12年 内田祥三東大全体計画案油彩<sup>30</sup>（岸田日出刀）  
 ～昭和6年  
 大正13年 工2号館竣工、駒場農学部、一高弥生町敷地交換調印、ロックフェラー図書館寄付申し入れ（14年受理）  
 大正14年 列品館、大講堂竣工  
 大正15年 理1号竣工、土地交換により、前田邸敷地取得  
 昭和3年 懐徳館寄付、付属図書館竣工  
 昭和4年 法文1、2号館一部竣工  
 昭和5年 農1号、工4号  
 昭和6年 医1号館  
 昭和9年 理2号館  
 昭和10年 法文1号竣工、工1号竣工、農学部弥生町移転  
 昭和11年 農2号館  
 昭和12年 医2号館  
 昭和13年 武道場  
 昭和16年 農3号館竣工（戦前の最後建築）  
 昭和17年 第二工学部  
 昭和18年 内田祥三総長  
 昭和22年 東京大学と改称  
 昭和24年 東京大学（新制）設立－教養学部、教育学部設置、新聞研  
 昭和27年 社研、新聞研1期工事竣工  
 昭和30年 教育学部1期工事竣工（～昭和47年）  
 昭和33年 薬学部設置、薬学部増築1期工事竣工

### 3-3 形成過程の記述の手順

一形成過程は以下のような流れに沿って記述される。

#### 1) 変化の4つの段階

形成過程全体は次節に示すように五つの時期に分けられる。その内、分析対象とした三つの時期—草創期、明治期、内田期—について更に原則として四つの段階に区分する。その各々につき、オープンスペースにかかわる変化の内容をまとめる。冒頭でその時期の変化の概要を述べる。

#### 2) 編年的なリスト—実際の展開

主要な建物、外構などの竣工年（着工年も必要な場合は含む）を（設計者などのデータは計画案との関連などで必要な場合のみ参照）編年的に並べたリストを作る。計画案とその変遷についても、併せて記載する。

この他、とくに、その時期の変容に関することで、確認すべき事項を合わせ記しておく。

#### 3) 配置図の変遷

1)で挙げた三つの時期の4つの段階について、その期間に起こった変化（建物の新增改築や移設、外構などの改変整備、各種動線の様態などオープンスペースを規定する諸特徴に関する変化）を配置図にマークする。（オープンスペースを規定する諸特徴）これは分析の基礎資料となる。段階を確定する目安は、部分的、全体的を問わずオープンスペースの形状、特性などに影響を及ぼすような新たな変化が生じたことである。

ただし、過度の繁煩をさけるため、資料から読みとれるすべての関与的变化をもって段階を区別することはしない。写真等の関連資料を綴用し変化の細大を判断、主要なオープンスペースの変化を読みとれる程度という基準で段階の数はまとめ、各時期に4つの段階を選ぶ。計画案とその変遷については、配置変化図表の該当する時期に併記する。

#### 4) その他資料類

上記2), 3)で明示できない周辺の状況や変化の詳細については、分析の過程に必要な資料を参照する。

### 3-4 本郷キャンパスの形成における五つの時期

本郷キャンパスの形成過程を概観すると、全体の空間編成の形成パターンにおいておおむね五つの時期を区別できる。ここではその具体的な時期の分けと判断の理由について概要をあらかじめ示す。また、説明の便宜を考え、各々の時期の特徴・性格から判断し、この五つを草創期、明治期、内田期、高度成長期、作家期と命名しておく。

第一に、本郷キャンパスは関東大震災を境に大きくその姿を変えた<sup>21</sup>。震災以前が、比較的全体への展望が曖昧、またスタイルや建築型という点でも多様で<sup>22</sup>、いわば自然発生的な成長を遂げていったのに対し、震災後は内田祥三の全体計画に基づき、統一的な建築スタイルと建築型、一貫した配置計画などに則って整備が行なわれた。ここで言う内田期と明治期が分けられる。次に第二次世界大戦後については、学制改革と高度成長期における大学の規模の拡大などを背景に、南面平行配置の近代建築が集中的に建設され、建物の形式、変容のパターンなどにおいてそれ以前との違いは明らかである。およそ昭和30年代頃がその境界となる。

震災前の時期についても、大学が設置され各科大学の最初の校舎と図書館が竣工し、一応総合大学の体をなすまでの期間を、それ以降の期間と区別できる。前半は、おそらくコンドルが残した全体計画に影響されながら、同時に擬洋風のオープンスペースの編成とヨーロッパ的な宮殿などを混成し用いた時期と考えられる。一方、後半は、コンドル案による筋書きからは読めない成長の段階であった<sup>23</sup>。

戦後の高度成長期以降の時期についても、ほぼ昭和50年代を境に前後二期に分けられる。50年以降は建詰まりのためそれまで見過ごされてきた特殊な空地に多様な建築の建て方が試みられた。その多くが建築家の手になるものであった。

以上をまとめ、東大本郷キャンパスの形成過程を、草創期(M10～M27)、明治期(M28～T12)、内田期(T12～S30年代)、高度成長期(S30年代～S50年代)、作家期(S50年代以降)の5つに区分けしておく。なお、ここで示した時期のうち分析対象となる三つの時期の区分については、各時期の変容を規定した編成形式の違いにより、最終的にその妥当性が明らかにされる。

一概要

この時期は、東京大学としての最初の新築校舎であった法文校舎が竣工した明治17年から図書館と各学部の最初の校舎が完成し、一応大学としての体を成すにいたるまでの時期である。大学が本郷に展開した最初期の区分としては他にもあるが<sup>24</sup>、全体のオープンスペースの編成形式について言うなら、明治28年以降の劇的な変化までを一つの区切りとできよう。当初は、東大の本郷移転前に建てられていた東京医学校、音楽取調所、理学部観象台その他教師館などが点在する空地だった。現正門あたりを中心に法文、工、理、図書館の建物が順次建設され、コの字型に広場を囲むように配置されてゆく。現理1号館あたりには、弥生門の方に向かって理本館が孤立して建てられる。医は現病院地区に別に門（鉄門）を構え、そこで展開する。すべて扉に囲まれた外界と比較的切り離されたオープンスペースの中に、相互関係も弱く独立的に配置される点で、その後の時期と区別される。

一実際の展開

図3-36、37、42

この時期に竣工した建物、整備された外構などを列挙する。年号は原則として竣工年月を表す。（以下同）

前史として東京医学校-医学部（M9）が、現病院地区で竣工する。別に開成学校（M6）-法文理三学部は、法文校舎（M17）まで神田総町にとどまる。医学部と同じく擬洋風の建物。

法文学部（M17.9）

工科大学（M21.7）、理科大学（M21.12）

東大成立以降、最初の計画は理学部であったが、建設は法文が先になり、その後、計画・着工は理科大学の次に工科大学が続く。竣工は逆に工科大学の方が一足は早い。

機械工学実験室（M21.6）、正門移動（M24頃）はほぼ法文校舎の正面にくる。図書館（M25.8）、理科大学（博物学）（M26.3）

一最初期の本郷構内

構内の自然地形は大きく見ると西側平坦部とそれより低い東側の平坦部の二つのレベルに分かれていた。その中では建物が建っている部分、段差や水場、傾斜面、馬場跡などを除くと、当初ただちに利用しえたのは現理学部1号館あたりの平坦部と、三四郎池西側の部分の二つの空地にはほぼ限定されていることがわかる。この時点では建設用地としては十分整備されていなかったことがわかる。

本郷構内の東京大学の施設として最初にその内容が一部でも確認されている校舎計画は法文<sup>25</sup>である。理科大学計画があるが、規模が法文より大きいということ以外、具体的資料はない。

理学部観象台（M11）が設置されていたが、大学設置の直後であり、何らかの全体計画のもとで行われたとは思えない。その後气象台と気象台に分かれ、明治21年には麻布移転する。

同様に、大学発足時に既に現医学部の前身である東京医学校が存在していたが、大学の一部として計画整備されたのではない。実際、大学に属した後、明治26年頃、移転構想を決定し、明治40年までに学部建物を病院と換地し、他の学部が展開する通称「山の上」に移転統合する。

一コンドルの計画案<sup>26</sup>

図3-5、6

この期の変化と関係の深い2つの事項について見ておく。コンドルの東大計画案と当時の擬洋風建築である。

コンドル東京帝國大学計画案（M12年-1879）は本郷キャンパスの全体計画の最初のもと考えられる。発表誌のバースの背景や構内の地形から判断し、別図のような配置をコンドルは考えていたと思われる。都市に向って三方を囲われた前庭を持ち、正面は本部・理科棟、左右は数学棟と語学棟という構成である。正面背後も、左右を博物館と図書館・講堂棟に囲われた裏庭となっている。

図3-4

それらのオープンスペースは中央に巨大な噴水を持つか、植栽らしきものが置かれ、建物も表と裏ではデザインが異なり、前庭に向かう構えを示す。

そこは中心性が明示され、単に各建物にいたる歩道が通る動線処理のオープンスペースではない。又、正面の本部棟は長大なファサードを持ち、中央部は二本の塔とその間のエントランスによって強調される。アクセスが正面からまっすぐ突き当たることもあり、前庭から裏庭まで貫通する強い軸性を感じさせる。



スタイルはゴシック系であるが、個々の建物から集合の形式まで軸性と表裏の二面性あるバロック的な両翼型宮殿形式の特徴が見られる。

一方、パスでは直線的な歩道が縦横に方向に走り、歩道以外は芝生様の仕上げに描かれる。建物も分棟形式。芝生に覆われた一体的なオープンスペースの上に建物が展開。都市と背後の庭園という二面性は弱い。

全体として宮殿的でありながら、校内全体に広がる田園的オープンスペースを特徴とする点では、アメリカのキャンパスとしての特性も合わせ持つ。<sup>27</sup>

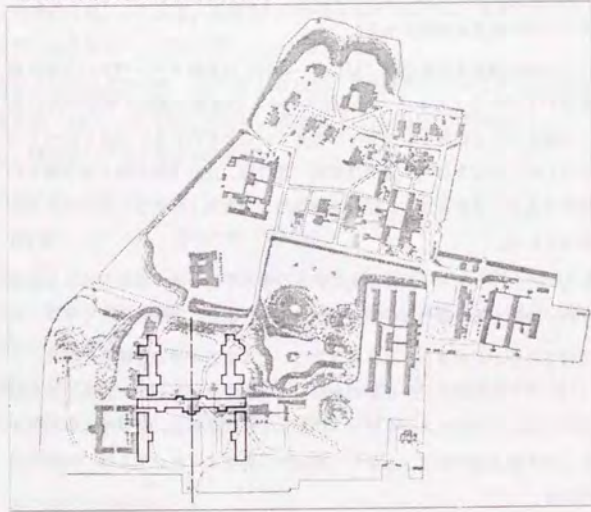
いずれにせよ、この案は全体配置のモデルとして考えると、この期の展開を理解しやすい。立案の翌年着工されるコンドル自身の法文校舎は計画案の正面左右に対面して置かれた建物と同じデザインと構成を使っている。その後、辰野の工科、菅繕による理科（博物）と図書館が続いた<sup>28</sup>。

これは本郷の敷地自体は狭くないものの<sup>29</sup>開発の最初期の時点では建設計画が可能な空地に限られていたことなど、コンドルの計画が実際の条件に適合するよう変形を受けつつ実現されていった過程とも言える。

すなわち、長大な本部棟を廃止し、建物が分割される。コンドル案の両サイドの建物が法文になる。医学部は別に、理科大学も独立し「小宮殿」の散開集合なす<sup>30</sup>。また、独立建物に分けたことは巨大な計画を段階を踏んで実施する必要があったと思われる。

コンドル東京大学計画案の配置想像図

3-4

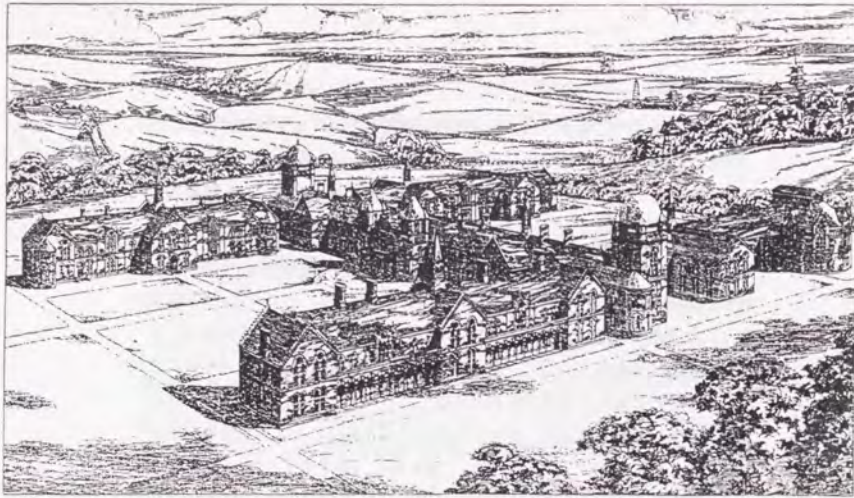


一擬洋風建築

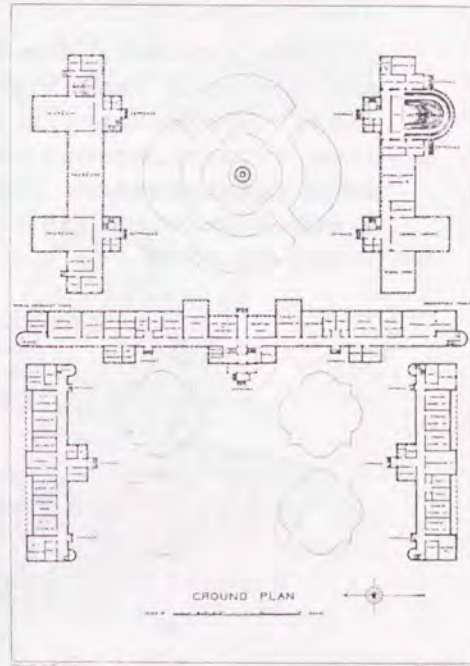
図3-10\*21

明治の10年頃までに整備された擬洋風の学校校地における全体の編成は、塀と門によって敷地が境界づけられる。建物一母屋はそうした閉じられた敷地の中に門からいくらか退いて門に正対する形で置かれる。門、塀と建物の間は正面玄関の前にロータリー状の植え込みが置かれ、その他の部分も左右に回り込むように道が続く以外は、植栽が施される。母屋の裏手には様々な付属屋が配置される。母屋の形式は平行配置であったり、コの字型、E字型であったり多様であるが、多くは背後に向かって開かれた平面形を持つ。中庭、裏庭も植栽が施されることがあるものの、正面側ほど厳格な対称性は意識されないのは裏手の建物の形式と同様である。また敷地内の塀沿いの部分にもしばしば植栽が施され、さらに内外の区別が明確になる。都市の街路が全くのドライな空間であるのに対し、塀を境に「屋敷森」の世界に一変する。構内は外から門という一点を通して窺い知るものであり、この前庭はその視点からの見えが重要である。逆に外から見えにくい裏回りはそのときどきの条件にあわせ適当に計画されたと考えられる。

こうした形式は、江戸期以来の大名屋敷の囲いの中で、外から見える範囲で西欧風の正面性と軸性の強い宮殿様の母屋を配する。オープンスペースは、その結果として建物の周囲に編成される。裏に回るにつれ、オープンスペースは建物によって規定される程度が弱まっていき、最終的には建物の形式と関係の弱い日本庭園風の非幾何学的なオープンスペースか運動場など建物と全く無関係なそれ自体としての条件に規定された形式をもつオープンスペースへと変わって行くことが多い。



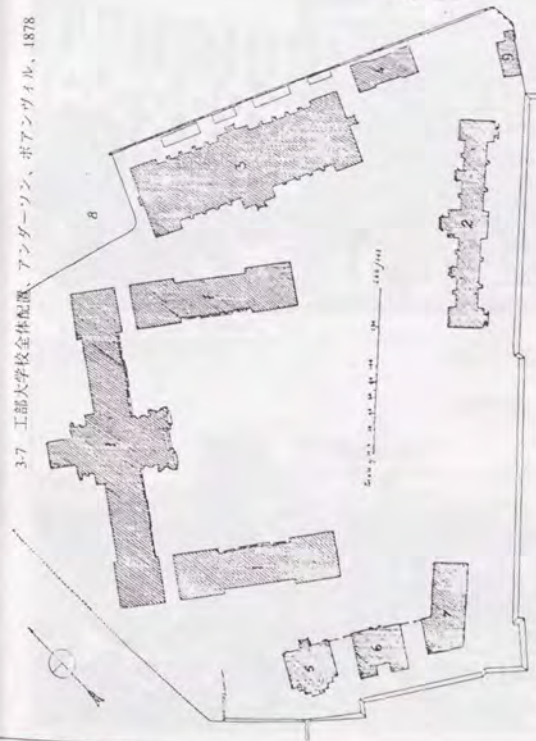
3-5 J.コンドル, 東京大学計画鳥瞰, 1884発表, 立案は1879頃か。



UNIVERSITY, JAPAN—St. JOHN'S COLLEGE, AMERICA.

3-6 同全体配置

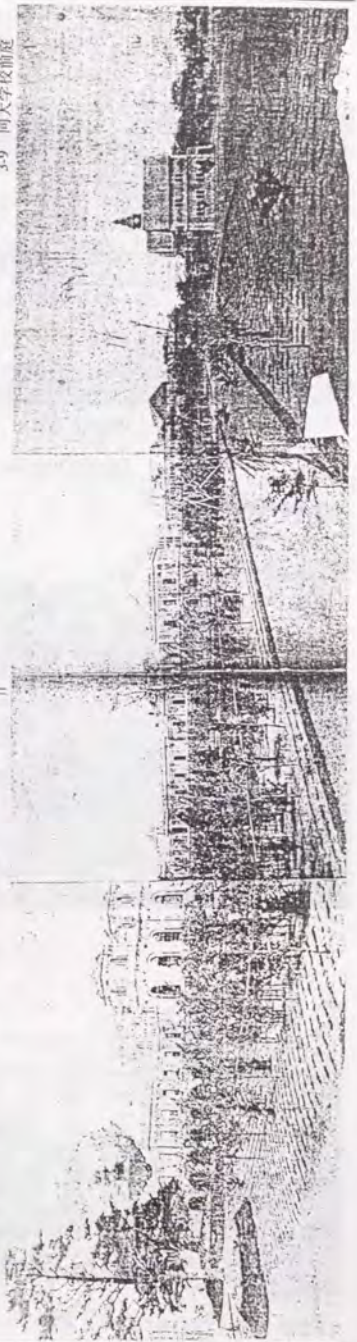
3-7 工部大学校全体配置、アンダーソン、ボアングイル, 1878

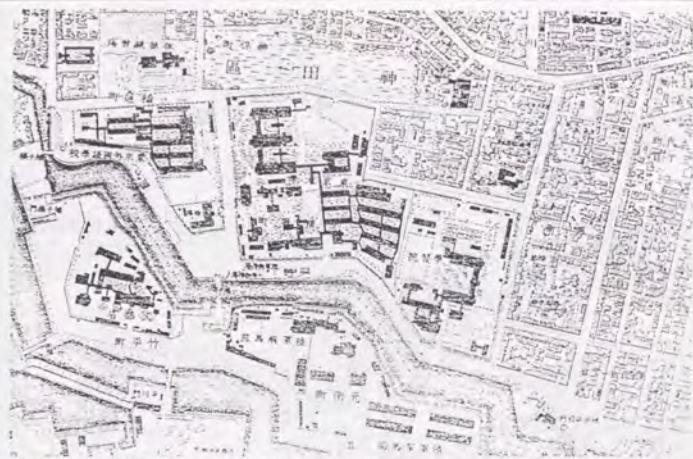


3-8 同大学校鳥瞰



3-9 同大学校前庭

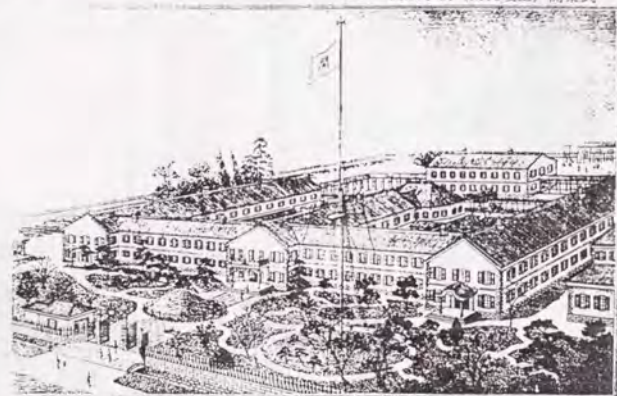




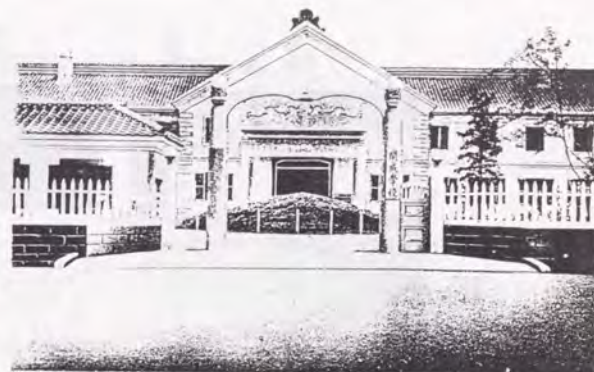
3-10 最初期の東京大学の配置、M16年頃、一橋錦町付近 学習院、外国語学校なども見える。



3-11 開成学校 (M16竣工) 開業式



3-12 同校鳥瞰



3-13 開成学校正面



3-14 同校正面背後の運動場



3-15 学習院 (M10竣工) 正面、M14頃



明治大学  
文部省

3-16 文部省 (M14竣工) 正面、M14頃



3-17 M16頃の本郷構内 医学部、付属医院、寄宿舎などが散開



3-18 竣工 (M9) 当時の医学校



3-19 M18頃の大手町付近の官庁街内務省、印刷局などが見える。



3-20 内務省（佐林忠恕設計、M7竣工）正面、M14頃



3-21 印刷局（ウォートルス、ポアンヴィル、M9竣工）正面、M14頃

一概要

この時期は大学の各組織の最初の施設が建てられた後を受け、大学及びその空間が急激に膨張していった時期である。概ね明治36,7年を境に前半期と後半期の二つに分けられる。前半は正門地区の一体的な整備が行われ、法文、医、工では拡充が進み、裏的な領域が正門地区背後に形成される。後半は理も含め施設の拡大が続き、それに伴い、構内には街路網と街区が形成される。特に工、医の背後の区域には膨大な裏の領域が集積されてゆく。

一実際の展開

図3-38,39,43

M28

正門移動、正門一帯整備(M28)から始まる。「正門」が北側へ二回目の移動(M24に次いで)を行い、同時に前庭の整備進む。M30年頃までに広場の形態つくる。軸によって整序された街路とその正門から発するその序列的な体系などによりオープンスペースの一体感強まる。他のオープンスペースが自然的な曲線を描く道を持つのに対し、著しい対照をなす。これ以降、直線的な街路をこの正門一帯の前庭や理科大学、医科大学周辺から漸次のばし、それに沿って主要な建物を並べてゆく。街路は規模、高さ、素材などの比較的類似した建物によって整然とした都市的空間-オープンスペースを形成してゆく。

M30

土木等仮教室(M26)、法・教室(M28.4)、正門からのびた軸上の道に沿って配置。

工・応用化学等(M29.7)裏への大規模建物の展開

M36

奇形な平面をもつ工・造船造兵土木(M36.7., M37.6.焼失)が、理(博物)と法文校舎の間のわずかな空地に正門前庭に張り付くように配置される。

工・電気実験室(M36.3., M37.3.)、法・教室2棟(M33.12., M35.3.)、

医・衛生、生理、医化学、薬物(M35.1.)医科大学移転開始。二面性保ち、かつ独立的部分を一体的にまとめる特異な建築型。これにより赤門は15M移動。

人類・教室、倉庫(M35.12.)、地震(M36.12.)、法。列品室(M33.8.)、学生集会所(M35-36)、精神物理実験室(M36-37)、医・動物室(M35)

理・本館前ロータリー整備(M36-37)。

M40

工・造船造兵土木改築(M39.2.-39.12.)小さな前庭・広場の形成。前庭・広場群へ。

医・病理(M37.6.)、医・解剖、法医(M39.11.)、薬学(M39.12.)ファサードがほぼ統一された街路の形成。道場(M39-40)、会計課・学生監(M40-41)

街路網の整備；総長濱尾新正門から伸びる銀杏並木作る。工科地区より理地区への街路、病院前街路、弥生門から理・本館への街路、正門前庭から赤門までの街路などが整備される。

T12 (前期)

理・動物等(M43.3.)、正門(M45.6.)、化学(T5.3., T11.5.)、法・事務室(M44)、法・八角講堂(T3.3.)、医旧本館移築(M44)、本部(T2.3.)、薬東館(T12.3)。本郷通り沿いの工・付属建物群(M44-45-車置場からT7-工・仮教室など)、初の土地の拡大(M43-44)。航空学仮教室(T9)を正門大前庭内に建設するなど狹隘の進行。

T12震災前の内田計画；工2号(大正11年6月14日着工同13年3月竣工)構造、仕上げなど内田期によく見られた特徴示すものの、二面性のある建築型-光庭型、配置などは明治期の特徴を引きずる。安田講堂は以前から配置が検討されていたところに位置が決定され、着工された。なお、安田講堂、列品館、法研は内田期。